永遠の真理

ETERNAL TRUTH

2018年 6月

「恐れるな、小さい群れよ」「回復するための計画（I）」「第三天使の大いなる叫び」「なすのはさみ揚げ」

永遠の真理

いま永遠の真理の土台の上に堅く立ちなさい。(3T p.45)

目次

今月の聖書勉強
回復するための計画（I） 4
聖書の教え

朝のマナ
恐れるな、小さい群れよ 7
Fear Not, Little Flock

現代の真理
「第三天使の大いなる叫び」 38
神の憐れみの最後の招き

力を得るための食事
なすのはさみ揚げ 42

お話コーナー
「エルサレム入城（I）」 44
イエスの物語

【正丸教会】
〒368-0071　埼玉県秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1
電話：0494-22-0465　FAX：0494-40-1045

【高知集会所】
〒780-8015　高知県高知市百石町 1-17-2
電話：088-831-9535

【沖縄集会所】
〒905-2261　沖縄県名護市天仁屋 600-21
電話：0980-55-8136

アクセス www.4angels.jp
メール　support@4angels.jp

発行日　2018 年 5 月 6 日
編集＆発行　SDA 改革運動日本ミッション
〒368-0071 秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1

Illustrations: Getty Images on Front page, Dreamtimes on Back page

Printed in Japan

われわれを天に結びつける信仰

「できますれば、わたしどもをあわれんでお助けください」（マルコ 9:22）。どれほど多くの魂が罪の重荷の下にこの祈りをくり返したことだろう。するとすべての者に向かって、あわれみ深い救い主はこうお答えになる、「もしできれば、と言うのか。信ずる者には、どんな事でもできる」（マルコ 9:23）。われわれを天に結びつけ、暗黒の勢力と戦う力をわれわれに与えてくれるのは信仰である。キリストを通して、神は、あらゆる罪の傾向を征服し、あらゆる誘惑に抵抗する手段をお与えになった。しかし、自分は信仰が足りないと思って、キリストから離れたままでいる者が多い。こういう魂は、無力と無価値のままに、あわれみ深い救い主のいつくしみにすがりなさい。自分を見ないで、キリストを見なさい。この世におられたときに、病人をいやし悪鬼を追い出されたおかたは、今日も同じに偉大なあがない主であられる。信仰は神のみことばによって生まれる。だから「わたしに来る者を決して拒みはしない」とのキリストの約束をしっかりつかみなさい（ヨハネ 6:37）。「信じます。不信仰なわたしを、お助けください」と叫んで、イエスの足下に身を投げなさい（マルコ 9:24）。そうするかぎり、あなたは決して滅びることはない、決して。

……この偉大なあがない主は、数時間前には、驚きあやしむ弟子たちの前に栄光の姿で立たれたばかりなのに、いまは身をかがめてサタンの被害者をそのころがりまわっている地面から立たせ、心もからだも健康にして父親と家庭へもどしておやりになる。

父の栄光の中からおいでになった神が、身をかがめて失われた者を救われる、―このことはあがないについての実物教訓であった。それはまた弟子たちの使命をあらわしていた。キリストのしもべたちの生活は、山の上でイエスといっしょに霊的な光の中にいることにだけ費やされるのではない。下の平地には彼らの働きがある。サタンのとりこにされた魂が、彼らを自由の身にしてくれる信仰のことばと祈りとを待っているのである。……

信仰、すなわち神にまったくよりたのみ、神のみわざに全的に献身するようになる信仰をもって、熱心にたゆまず神に嘆願することによってのみ、人は「もろもろの支配と、権威と、やみの世の主権者、また天上にいる悪の霊に対する戦い」において、聖霊の助けを受けることができるのである（エペソ 6:12）……

もしこのような信仰があれば、あなたは神のみことばと、神がお定めになったあらゆる有益な方法をとらえる。こうしてあなたの信仰は強められ、天の力があなたの助けとして与えられる。サタンがあなたの道に積みあげた邪魔物は、永遠の山のように乗り越えることができないようにみえても、それは信仰の要求の前には消えうせてしまう。「あなたがたにできない事は、何もないであろう」（マタイ 17:20）。（各時代の希望中巻 202-205）

聖書の教え–現代の真理–

第５課　回復するための計画（Ｉ）

人類の救い

アダムとエバが自分たちの違反の結果を悟ったとき、彼らの心は深い悲しみに満たされました。破られた神の律法は罪人の命を要求し、エホバの公正と義が変更されることはあり得ないのでした。

アダムとエバは、堕落する前は、高貴な力と均整のとれた思いを持っていました。彼らは創造主と完全に調和していました。彼らは純潔な思想と聖なる目的をもっていました。しかし、罪によって彼らの力はゆがめられ、利己心が愛にとって代わりました。彼らの性質は非常に弱められたため、自分自身の力で悪の力に抵抗することはできなくなりました。憐れみのうちに、神は彼らをその悲惨な状況のまま、何の希望もなく放ってはおかれませんでした。人間が永遠の死から救われることのできる素晴らしい計画が考案されました。この計画は、非常に驚くべきもので、人が限りない永遠の年月をかけて研究主題としても、完全に理解することは決してできないのです。

前回は、堕落した二人のために神がみ約束をお与えになったこと、また彼らにご自分の偉大な救いの計画についてお教えになったことを見ました。

神の愛が明らかにされる

神の性質は、シナイ山においてモーセに明らかにされた。「主は、彼の前を過ぎて宣べられた。『主、主、あわれみあり、恵みあり、怒ること遅く、いつくしみと、まこととの豊かなる神、いつくしみを千代までも施し、悪と、とがと、罪とをゆるす者、しかし、罰すべき者をば決し許さず、父の罪を子に報い、子の子に報いて、三、四代に及ぼす者。』」（出エジプト記 34:6,7）。

神が罪を放免することはおできになりませんでした。しかし、神の憐れみと愛の心は、人が本来の状態に回復されるという希望なく死ぬがままに放っておくことはおできになりませんでした。どのようにしてこれが可能だったでしょうか。

「いつくしみと、まこととは共に会い、義と平和は互いに口づけをし」（詩篇85:10）。

これがまさに、救いの計画の本質です！罪の支払う報酬、すなわち死が支払われなければなりませんでした。そこで人の救いを確保するために、身代わりが人にとって代わらなければなりませんでした。神の御子、すなわち人間を創造されたお方が、罪を犯した人類のために自らを犠牲として差し出されました。わたしたちの救いのための代価を支払うことができるのは、このお方だけでした。堕落した人間は、聖なるご要求を満たすことはできませんでした。「すなわち、全ての人は罪を犯したため、神の栄光を受けられなくなっており」（ローマ3:23）。「罪を犯す魂は死ぬ」（エゼキエル18:20）。

いかなる人も他の人のために、あるいは自らのために贖うことはできません。各々、自分自身の罪のために死ななければなりません。天使が身代わりとなることはできませんでした。なぜなら、堕落しなかった天使たちは罪のないものでしたが、彼らも被造物であることには変わりがないからです。人を創造されたお方のみが人を再び買い戻すことがおできになるのでした。他はだれも価を払えるものはなく、失われた者を贖うための要求に応じることはできませんでした。

「神は、そのひとり子を賜ったほどに、この世を愛してくださった。それは御子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」（ヨハネ3:16）

すべての国の希望

人間が堕落した後、贖い主の約束が、預言や律法、儀式の中で繰り返されました。すべては救い主の来臨を示しており、人の希望を期待で輝かせてきました。

「それゆえ、主はみずから一つのしるしをあなたがたに与えられる。見よ、おとめがみごもって男の子を産む。その名はインマヌエルととなえられる」（イザヤ7:14）。

救い主の名称や肩書はみな、神のみ約束の中に希望をもたらしました。インマヌエルとは、「神われらと共にいます」という意味です（マタイ1:23）。

「彼女は男の子を産むであろう。その名をイエスと名付けなさい。彼は、おのれの民をそのもろもろの罪から救う者となるからである。」（マタイ1:21）。

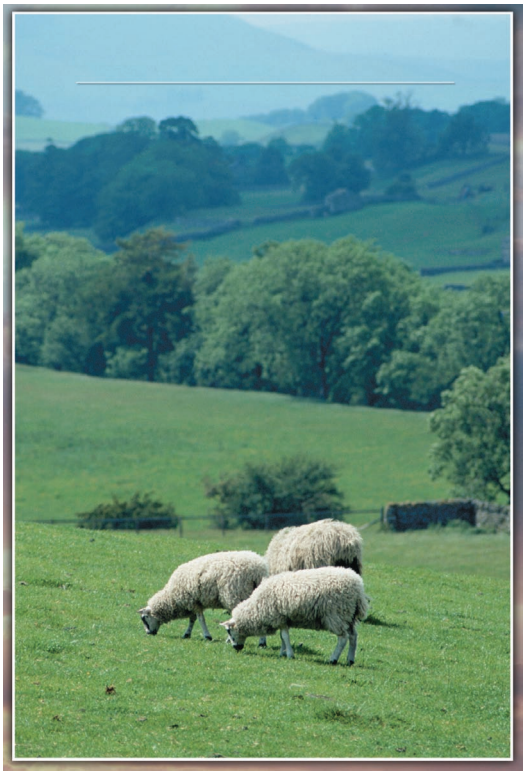
イエス、すなわち世の救い主として知られる名は、最も大切な名前です。なぜなら、その名は、わたしたちの堕落した罪の性質から救われるという貴重なみ約束を含んでいるからです。堕落しなかった天使たちは、贖いの計画の中で人と関

心を共にしています。「御使たちはすべて仕える霊であって、救を受け継ぐべき人々に奉仕するため、つかわされたものではないか」（ヘブル 1:14）。

天使たちは、罪のうちに堕落している魂に対して、愛とたゆまない見守りを与えることについて喜びを感じています。彼らは自分自身でさえ知りえないほど、人をキリストとのより近い交わりに入れるために人の精神に働きかけているのです。「よく聞きなさい。それと同じように、罪人がひとりでも悔い改めるなら、神の御使たちの前でよろこびがあるであろう」（ルカ 15:10）。

恐れるな、小さい群れよ

Fear Not, Little Flock



「世界の人口に比べれば、神の民は、常にそうであったように、ごく小さな群れであろう。しかし彼らが、みことばに示されている真理に立つならば、神は彼らの逃れの場となって下さる。彼らは全能の神の広い盾のもとに立つのである。」(患難から栄光へ下巻 296)

6月

6月1日

譴責を喜んで受け入れる

「しかし、わたしはほんとうのことをあなたがたに言うが、わたしが去って行くことは、あなたがたの益になるのだ。わたしが去って行かなければ、あなたがたのところに助け主（慰め主：英文訳）はこないであろう。もし行けば、それをあなたがたにつかわそう。それがきたら、罪と義とさばきとについて、世の人の目を開くであろう。」（ヨハネ 16:7, 8）

慰め主は譴責なさるお方として、すなわちわたしたちの品性の欠点をわたしたちの前にあらわにし、それと同時に御父と一つであられるお方の功績を表し、希望のない者に希望を与えられるお方として来られるのである。……

しかし、あなたがたの多くは、「わたしは祈り、努力し、奮闘したが、一歩も先に進んだのが見えない」と言う。あなたは自分が何かを稼いでいると、すなわち自分の奮闘とわざによって自分の贖いの代価を払っていると思ったのであろうか。これはあなたが決してできないことである。キリストがあなたの贖いの代価を払われたのである。あなたができることは一つしかない。それは、神の賜物を受け取ることである。あなたはことごとく欠乏した状態でやってきて、十字架に掛けられまたよみがえられた救い主の功績を嘆願することができる。しかしあなたは、キリストがあなたの悪、あなたの日毎の罪への放縦をこのお方の義の衣で覆ってくださることを期待して来ることはできない。神の民は生けるぶどうの木に接木（つぎき）された枝のように、ぶどうの木の性質にあずかる者となるべきである。もしあなたが真のぶどうの木の生ける枝なら、イエスは試みによって、また苦難によってあなたを試されるであろう。それは、あなたがもっと豊かに実を結ぶことができるためである。

わたしたちにもっと多くの御霊と神の力がない理由は、わたしたちがあまりにも自分自身に満足しているからである。真理に改心した者たちの間には、ある程度の前進を遂げると、その後それ以上進歩しない無感動な状態に落ち着いてしまう著しい傾向がある。彼らはちょうど自分たちがいるところに立ち止まり、わたしたちの主なる救い主イエス・キリストの恵みと知識のうちに成長することを止めるのである。しかしキリストの宗教は、継続的な進歩を要求する性質のものである。主はわたしたちがいつもキリストの満ち満ちた高さに到達したと感じるようにとは計画なさらない。永遠にわたってわたしたちは、教会において万事の頭であられるお方の知識に成長すべきである。もしわたしたちがこのお方の恵みに頼りたいのであれば、わたしたちは自分たちの貧しさを感じなければならない。わたしたちの魂は、キリストがわたしたちのために働いて下さらなければ滅んでしまうと悟るまでに、神を求める熱烈な願望に満たされなければならない。

わたしたちが救いを完全にキリストに依存していることを感じるようになるときに、わたしたちは腕組みをして、「わたしにはすることがない。わたしは救われている。イエスがすべてをなされた」と言うべきであろうか。否。わたしたちは、神の性質にあずかる者となることができるように、全精力を傾けるべきである。（ﾊﾞｲﾌﾞﾙ・ｴｺｰ 1892 年 5 月 15 日）

聖霊が自覚させる

「〔助け主（慰め主：英文訳）が〕きたら、罪と義とさばきとについて、世の人の目を開くであろう。罪についてと言ったのは、彼らがわたしを信じないからである。義についてと言ったのは、わたしが父のみもとに行き、あなたがたは、もはやわたしを見なくなるからである。さばきについてと言ったのは、この世の君がさばかれるからである。」（ヨハネ 16:8-11）

サタンの統治が征服され、服従させられるのは、聖霊の大いなる働きを通してである。罪について目を開かせ、それを人間の同意によって魂から追い出すのは聖霊である。その時、思いは新しい律法の下に連れてこられる。そしてその律法は自由のきわめて尊い律法である。イエスは魂から罪の奴隷の足かせを壊すために来られた。なぜなら罪は、魂の自由が失われたときにのみ勝利することができるからである。イエスは人間の悲しみと悲嘆の深みのきわみまで手を伸ばされた。そしてこのお方の愛は人をご自分に引き寄せるのである。聖霊の働きを通して、このお方は思いを堕落から引き上げられ、それを永遠の現実にしっかり固定される。キリストの功績を通して人は自分の最も崇高な力を働かせ、罪を自分の魂から追い出すことができるのである。……

聖霊がさばきについて悟らせるのであった。「さばきについてと言ったのは、この世の君がさばかれるからである」（ヨハネ 16:11）。堕落したことのない世界は人類のための、神の御子の争闘と試練を見た。彼らは、かつては神によって高く高められていたが、天から追い出された者の不正な働きを見てきた。……天において、彼は神の律法に対して不平を言い、それは不必要だと宣言したのであった。（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1893 年 4 月 25 日）

聖霊は人の注意をカルバリーの十字架で払われた大いなる犠牲に向け、人に対する神の愛を世に表し、罪を自覚した魂に聖書の中にある尊い約束を開こうと努めて常に働いている。暗くされた思いに義の太陽の輝かしい光線をもたらすのは、聖霊である。人の心が、その人のうちで、永遠の真理について目覚めた理解力によって燃えるようにするのは、聖霊である。思いの前に義の道徳的標準を提示し、罪について目を開くのは聖霊である。悔いのない悔改めに導く、神のみこころに添うた悲しみを生み出し、すべての罪から救い出すことのできる唯一のお方を信じる信仰を抱かせるのは聖霊である。一時的であり滅びやすい事柄から人の愛情を引きはなし、それを永遠の嗣業、不滅の永遠の事柄に定着させることによって、品性を変化させる働きをするのは聖霊である。（ｻｲﾝｽﾞ・ｵﾌﾞ・ﾀｲﾑｽﾞ 1893 年 4 月 17 日）

6月3日

どのように聖霊が導くか

「けれども真理の御霊が来る時には、あなたがたをあらゆる真理に導いてくれるであろう。それは自分から語るのではなく、その聞くところを語り、きたるべき事をあなたがたに知らせるであろう。」（ヨハネ 16:13）

教えを受ける素直な、祈りに満ちた精神をもって聖書に向かい、その言葉を神の言葉として研究する者はみな、神からの悟りを受ける。……時々、知的能力を持ち、教育と教養によって磨かれた人々が、聖書のある文章を理解することに失敗する一方で、教育を受けておらず、理解力が弱く、思いが訓練を受けていない人々が、前者が神秘と宣言し、あるいは重要ではないこととして見過ごしていたことに力強さと慰めを見出しつつ、その意味を把握するというのは事実である。これはなぜだろうか。……後者の部類の者たちは、自分たちの理解に頼ることをしない。彼らは光の源、聖書に霊感を与えられたお方のもとに行き、心をへりくだらせて神に知恵を求め、それを受けるのである。真剣に求める者たちによって、まだ発見されるべき真理の鉱脈がある。キリストは真理を、畑に隠された宝として描写された。それは地表に横たわっているのではない。わたしたちはそれを掘り起こさなければならない。しかし、それを発見するにあたって成功するのは、わたしたちの知的能力にはそれほど依存せず、心のへりくだりと、神の助けをつかむ信仰に依存しているのである。

聖霊の導きがなければ、聖書の意味を曲解したり、誤解したりする危険がある。聖書を読んでもなんの益も受けず、かえってそれによって大きな害をこうむる場合もある。敬虔な心と祈りがなくて神のみ言葉を開いたり、思考と愛情が神にしっかりと定着していなかったり、または、神のみ心に調和しないでいると、思いは疑惑の雲でおおわれる。そして聖書研究をしていながら、懐疑心が強められるのである。敵が思想を支配して正しくない解釈を暗示する。

人が言葉にも行いにも神と一致しようと求めていなければ、どれほど学識のある人であっても聖書を理解するのに誤りがちになるため、彼らの解釈を信頼するのは安全ではない。わたしたちが神の御心を行おうと心から求めているとき、聖霊はこのお方のみ言葉の教訓を取り上げ、それらを魂の板に書きつけながら、それらを生活の原則とされる。そしてすでに与えられた光に従っている者たちだけが、さらなる聖霊の啓発を受けることを望むことができるのである。……「神のみこころを行おうと思う者であれば、だれでも、わたしの語っているこの教が神からのものか、それとも、わたし自身から出たものか、わかるであろう」（ヨハネ 7:17）。（教会への証 5 巻 704, 705）

御父はあなたを愛しておられる

「わたしはこれらのことを比喩で話したが、もはや比喩では話さないで、あからさまに、父のことをあなたがたに話してきかせる時が来るであろう。その日には、あなたがたは、わたしの名によって求めるであろう。わたしは、あなたがたのために父に願ってあげようとは言うまい。父ご自身があなたがたを愛しておいでになるからである。それは、あなたがたがわたしを愛したため、また、わたしが神のみもとからきたことを信じたためである。」（ヨハネ 16:25-27）

御父はご自分の御子を愛されるように、あなたを愛される。なぜなら、ご自分の御子が自らを犠牲として捧げることによって、正義の剣を防いだからである。キリストは無限の値を払ってあなたを買い取られたので、このお方はあなたを有利な立場に置くためになされたことに対して、あなたが感謝を示すことを望まれる。このお方は御父に「ここにわたしが命を与えた哀れな罪人がいます。彼はわたしの恵みによって救われています。あなたの子として彼を受け入れてください」と仰せになる。あなたは御父が拒むと思うだろうか。（世界総会広報 1901 年 4 月 4 日）

御父は、その大きななだめのそなえもののゆえに、わたしたちを愛されるのではなく、わたしたちを愛するがゆえに、なだめのそなえものをお与えになったのである。キリストは、御父が堕落した世界に、このお方を通してご自分の限りない愛を注ぐことの出来た仲介者であった。「神はキリストにおいて世をご自分に和解させ」とある（コリント第二 5:19）。神は御子と共にお苦しみになった。ゲッセマネの苦しみ、カルバリーの死を通し、限りない愛をもっておられる神はわたしたちの贖いの価を払われたのである。（ﾊﾞｲﾌﾞﾙ・ｴｺｰ 1892 年 8 月 1 日）

天の神はご自分の御子を愛されるように、わたしたちを愛される。全世界は神に対する反逆のうちにある。しかし、狭い門から入るために奮闘し、励み、苦闘する者たちは、特別な優しさをもって神に愛されている者たちであり、彼らは広い道を見出すようになる。なぜなら、「しかしあなたの戒めは限りなく広いのです」（詩篇 119:96）。（同上　1894 年 10 月 4 日）

御父は御子をご自分の右の座につかせて、あらゆる権威と主権にはるかに勝る栄誉をお与えになった。御父は十字架にかかられたお方を迎え入れ、栄光と誉れの冠をかぶらせることにより、大いなる喜びと嬉しさを表された。そして大いなる贖いを受け入れることで、御子に神が示された恩恵の一切が、神の民に示されている。愛のうちに自分たちの利害をキリストと一つにした者たちは、御子にあって受け入れられている。彼らはキリストと共に苦しみ、このお方の栄光は彼らにとって大きな関心事である。なぜなら、彼らはこのお方にあって受け入れられているからである。神は、御子を愛されるように彼らを愛される。キリスト、インマヌエルは、神と信者との間に立たれる。……このお方の犠牲はどの点からみても十分である。……御父は御子を抱いておられる。そして、ここにはこのお方を受け入れるすべての者が含まれている。「彼を受けいれた者、すなわち、その名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えたのである」（ヨハネ 1:12）。彼らはこのお方の選ばれた者たちであり、天という偉大な王国におけるキリストの共同の相続人である。彼らは、このお方が勝利したように勝利するのである。（同上 1899 年 5 月 22 日）

6月5日

高きところより防備を固めて下さる

「これらのことをあなたがたに話したのは、わたしにあって平安を得るためである。あなたがたは、この世ではなやみがある。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている。」（ヨハネ 16:33）

キリストはわたしたちの指導者であられる。このお方はご自分の兵士たちの前に戦いの計画を提示される。このお方は、争闘の差し迫った危険を指摘し、すべての者たちに代価を考慮するようにと命じられる。わたしたちが戦いのためにしなければならない準備をお示しになるとき、このお方はわたしたちに神の助けが与えられることを保証なさる。わたしたちの人間の弱さにあって、わたしたちは全能者の行いをすることができるようにさせられるのである。

キリストはご自分の兵士たちを高い所に連れて行き、大連合が彼らに敵対してずらりと並んでいるのをお見せになる。このお方は彼らに、彼らの戦いは、血肉に対するものではなく、もろもろの支配と、権威と、やみの世の主権者、天上にいる悪の霊に対する戦いであることを思い出させられる。このお方は彼らが永遠の命のために戦っていることを思い出させられる。天の宇宙は天軍の司令官であられるキリストを頭として、このお方と共に争闘のために整列している。弱さが人間を囲んでいるが、キリストがお与えになる力のうちに、わたしたちは勝ち得てあまりあるのである。（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1906 年 4 月 12 日）

サタンの勢力はわたしたちに対抗して隊列を組んでいる。彼は油断も隙もない敵であるが、キリストの警告に従えばわたしたちは安全である。「誘惑に陥らないように、目をさまして祈っていなさい」。抵抗し克服すべき敵がいるが、イエスはわたしたちのそば近くにおられ、義務のためのあらゆる努力と身構えを力づける備えが出来ておられる。（ｻｲﾝｽﾞ・ｵﾌﾞ・ﾀｲﾑｽﾞ 1888 年 1 月 20 日）

あなたは一人で戦うようには求められていない。キリストと天の御使があなたと共に戦っている。輝かしい側を見なさい。もしあなたがしている働きが妨害されたら、それが自分の過ちではないことを確かめてから、主にあって喜んで前進しなさい。天は喜びで満たされている。天は、人類の贖いのためにこれほど素晴らしい犠牲を払われたお方への讃美によって鳴り響いている。地上にある教会も讃美で満たされるべきではないだろうか。クリスチャンは世界中にキリストに仕える喜びを宣布するべきではないだろうか。（見張り人 1902 年 12 月 4 日）

信者としてのわたしたちの勝利は、キリストの恵みを通して得られるものであり、これはご自分に信頼を置くすべての者に、このお方が与えることができ、また与えてくださるものなのである。これは、キリストがそれによってわたしたちを元気づけたいと思っておられる良き知らせである。（ｻｲﾝｽﾞ・ｵﾌﾞ・ﾀｲﾑｽﾞ 1897年9月2日）

イエスは……「もしあなたがわたしを信じるなら、世があなたに打ち勝つことはない。わたしが勝利したのは世である。わたしが勝利したので、もしあなたがわたしを信じるなら、あなたは勝利するのである」と仰せになる。（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1892 年 4 月 12 日）

永遠に救う知識

「これらのことを語り終えると、イエスは天を見あげて言われた、…… 永遠の命とは、唯一の、まことの神でいますあなたと、また、あなたがつかわされたイエス・キリストとを知ることであります。」（ヨハネ 17:1, 3）

あなたは神のご品性についてもっと知りたいと望んでいるだろうか。そうであるなら、聖書はイエス・キリストのご品性のうちにこのお方の啓示を与えているということを、心に留めなさい。（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1902 年 3 月 25 日）

クリスチャンの恵みと経験の全体の要点は、キリストを信じること―神と神の遣わされた御子を知ることからなっている。しかし、多くの者がここで失敗する。なぜなら彼らは神を信じる信仰に欠けているからである。キリストの自己否定とへりくだりをこのお方と共にすることを望むかわりに、彼らは自己の最高位を常に求めているのである。彼らが岩の上に落ちて砕かれることを拒む限り、彼らは神の愛すなわちこのお方の御品性を感謝することはできない。わたしたちはキリストと一つであるかもしれない。しかし、わたしたちがこのお方のへりくだりと苦悩を共にすることがどういうことであるかということを知ることができるように、わたしたちは自分たちの方法、自分たちの意志を喜んで屈服させ、キリストのうちにあった思いを持たなければならない。……ああ、もしわたしたちが神の愛を感謝しさえするならば、どれほどわたしたちの心は広くされ、わたしたちの限られた同情心が膨らむことであろう。ついにそれらは利己心という氷のように冷たい障壁を打ち破るようになるのである。そしてわたしたちの理解は、今よりもっと深くなる。なぜならわたしたちは表面下を見るようになるからである。

キリストがわたしたちのために耐えられたへりくだりに、わたしたちがそれほど深く感銘を受けないのは、またこのお方の屈辱が、すべての魂が自己を低くしイエスを高めるように導かないのは、わたしたちが神を知らず、キリストを信じる信仰を持たないからである。主は、あなたがご自分の力あるみ手の下に自分をへりくだらせるよう訴えておられるが、それはあなたがこのお方の聖潔にあずかることができるためである。あなたは主なるお方の上にいるべきではない。そうではなく、このお方が世におられたときのように、あなたも同様であるべきである。ああ、もしあなたがこのお方があなたを愛されたようにこのお方を愛するなら、神の御子の経験についての暗い章の知識から、後ずさりしないだろうに。

キリストの苦しみをこのお方と共にするためには、わたしたちは世の罪を取り除く神の御子を見なければならない。わたしたちがキリストのへりくだりを熟考し、このお方の自己否定と自己犠牲を見るとき、わたしたちは、罪を犯した人間に対する神の愛のあらわれに驚嘆してしまう。（同上 1892 年 5 月 24 日）

神の戒めへの従順は、人が本物の救うことのできる神の知識を所有しているという唯一の証拠である。（原稿 21 巻 410）

6月7日

一つのものとして優しく守られるために

「わたしは彼らのためにお願いします。わたしがお願いするのは、この世のためにではなく、あなたがわたしに賜わった者たちのためです。彼らはあなたのものなのです。わたしのものは皆あなたのもの、あなたのものはわたしのものです。そして、わたしは彼らによって栄光を受けました。わたしはもうこの世にはいなくなりますが、彼らはこの世に残っており、わたしはみもとに参ります。聖なる父よ、わたしに賜わった御名によって彼らを守って下さい。それはわたしたちが一つであるように、彼らも一つになるためであります。」（ヨハネ 17:9-11）

神は民を世から導き出し、神の戒めとイエスの信仰という永遠の真理の高められた土台に導いておられる。このお方はご自分の民を訓練し準備させられる。彼らは、一人が一つのことを信じて、他の者が正反対の信仰と見解を持ち、各自が体から独立して動くといった不和の状態になるのではない。このお方が教会の中におかれた様々な賜物と統治を通して、彼らはみな信仰の一致に到達するのである。もし一人の者が兄弟の意見にかまわず、聖書の真理について自分の見解を取り上げ、自分の独特の見解に正当性を持たせ、自分のふるまいを正当化して、他の人々にその見解を押しつけるなら、彼はどのようにしてキリストの祈りを成就できるのであろうか。そしてもし他の者、また他の者が起こり、各々が体なる教会の信仰と無関係に、自分の好むことを信じ、話す権威を主張するなら、どこにキリストと御父の間に存在していた調和、またキリストがご自分の兄弟たちの間に存在するようにと祈られた調和が存在するのだろうか。

神は民を導き、神の戒めとイエスの証という一つの大いなる信仰の土台の上に彼らを定着させておられる。このお方は、ご自分の民に、明瞭で筋の通った聖書のまっすぐな一連の真理を与えられた。この真理は天から由来したのであり、隠された宝のように探されてきた。それは、聖書の注意深い研究と多くの祈りを通して掘り起こされてきた。（教会への証 3 巻 446, 447）

神の民には戦わなければならない、差し迫った激しい戦いがある。しかしこれらの戦いは自分の兄弟に対してではない。神の働き人の一番弱い者の感化でさえ傷つけ、弱め、壊そうとするすべての欲求は、天の書物にイエス・キリストの感化を弱める欲求として記録されている。わたしたちが着手するべき戦いは、神の民に敵対して整列している悪の同盟に対して遂行されるべきである。しかし、自分の兄弟に向かって武器を向ける者はわざわいである。神は、天の御使と一致して働くべきであること、また天使だけが戦いに携わっているのではないことを、わたしたちに思い起こさせてくださる。（ホーム・ミショナリー 1896 年 8 月 1 日）

6月8日

人気のない真理が聖別する

「わたしがお願いするのは、彼らを世から取り去ることではなく、彼らを悪しき者から守って下さることであります。わたしが世のものでないように、彼らも世のものではありません。真理によって彼らを聖別して下さい。あなたの御言は真理であります。あなたがわたしを世につかわされたように、わたしも彼らを世につかわしました。」（ヨハネ 17:15-18）

キリストの懇願の重荷は、このお方を信じる者たちが世の悪から守られ、真理によって聖別されるようにということであった。このお方は、わたしたちを真理が何であるかといった、あいまいな憶測をするがままにされないで、「あなたの御言は真理であります」と付け加えられた（ヨハネ 17:17）。神のみ言葉はわたしたちの聖化が成就するための手段である。それなら、わたしたちが聖書の聖なる指示に精通することは、最も重要なことである。……わたしたちはもし、自分の怠慢によって神のみ言葉の要求について無知であるなら、言い訳が立たないのである。神は、わたしたちにご自分の御心の啓示であるみ言葉を与えられ、すべての真理に導くために、求める者に聖霊を約束しておられる。だから神の御心を行うことを本当に望むすべての魂には、この教えを分からせてくださる。

世は偽りの教えで満ちている。だからもしわたしたちが聖書を自分自身のために堅く決心して探求しないなら、真理の代わりにその誤りを受け入れ、その習慣を取り入れ、自分自身の心を惑わすのである。世の教えと習慣は神の真理に敵対している。世の奉仕を捨てて神の奉仕へと向かうことを求める者は、神の助けを必要としている。彼らはシオンに向かって顔を火打ち石のようにしなければならない。彼らは世と肉と悪魔の反対を感じるが、なお世の霊と感化に反して進まなければならない。神の御子が人類の傲慢な偏見と不信に大胆に立ち向かわれたとき以来、イエスの宗教に対する世の態度には、何の変化もない。キリストの僕は反対と非難の同じ精神に会わなければならない。……

真理はキリストの時代には人気がなかった。それはわたしたちの時代においても人気がないのである。サタンが人を高慢にするような作り話を聞かせて、真理を嫌う気持ちをはじめて人間のうちに植えつけて以来、真理はいつも不人気であった。……真心を持って神を愛する者たちは、イエスの内にあるのと同じ真理をもっと真剣に望むべきである。彼らはへりくだった心で聖書を探求し、熱心に何が真理であるか知ることを願うべきである。なぜならキリストは、ご自分の弟子たちが真理によって聖別されるようにと祈られたからである。（レビュー・アンド・ヘラルド 1888 年 2 月 7 日）

6月9日

十字架を掲げることが一つにする

「わたしは彼らのためばかりではなく、彼らの言葉を聞いてわたしを信じている人々のためにも、お願いいたします。父よ、それは、あなたがわたしのうちにおられ、わたしがあなたのうちにいるように、みんなの者が一つとなるためであります。すなわち、彼らをもわたしたちのうちにおらせるためであり、それによって、あなたがわたしをおつかわしになったことを、世が信じるようになるためであります。」（ヨハネ17:20, 21）

神があなたに与えられた光を取り上げ、どのような犠牲があろうともそれに従いなさい。これがあなたの唯一の安全である。あなたには調和するようになるための働きがある。自己が十字架にかけられてでもそれをするように、主があなたを助けられるように。軽視され拒まれてきた光線を集めなさい。柔和とおののきと恐れをもってそれらを集めなさい。古代イスラエルの罪は神の表された御旨を無視し、清められていない心の導くがままに自分たちの道に従ったことにあった。現代のイスラエルは、彼らの足跡にすみやかに従っており、主の不快は確かに彼らの上に置かれている。

自分が好きなことをすることは決して難しいことではないが、自分の傾向に真っ向から反対した方針を取ることは十字架を掲げることである。キリストはご自分が御父と一つであるように、弟子たちも一つとなることができるようにと祈られた。この一致は神がキリストを送られた世に対するこのお方の信任状であった。諸問題に関して強情が捨て去られるとき、そこには信者たちのキリストとの一致がある。このためにすべての者が断固として祈り働くべきであり、そのようにしてご自分の教会における一致のために祈られたキリストの祈りにできる限り応えるのである。（教会への証 5 巻 93, 94）

わたしたちが必要としているのは追加的な証拠ではなく、わたしたちがすでに理解している真理を他の人々に忠実に分け与えることによって、それについての感銘が深く徹底的なものとされることである。各自はまず自分自身の問題にあたるべきである。それから彼は自分の兄弟と完全に一致して行動すべきである。信者たちの心はキリストの心のようになるべきである。一つ一つの鼓動がキリストの心臓と調和して鼓動しなければならない。わたしたちはキリストと一つになるべきであり、互いに一つとなるべきであるが、それは神がキリストを世にお送りになったことを、世が知ることができるためである。（聖書訓練学校 1903 年 12 月 1 日）

救い主との霊の一致、調和、和合―これらはクリスチャンにはっきりと認められるしるしである。このようにして彼らは、キリストは生ける神の御子であり、このお方は救い、永遠の命でさえもこのお方を信じるすべての者に与えることができるということを、世に示すことができる。……

わたしたちがキリストと一つとなるとき、わたしたちは互いに一つとなり、神に対し、このお方のみ言葉に対し、またわたしたちの兄弟に対して、確固とした忠誠を明らかにするのである。真の信者は自分の兄弟姉妹を信頼する。（太平洋連合記録 1902 年 7 月 3 日）

調和における栄光

「わたしは、あなたからいただいた栄光を彼らにも与えました。それは、わたしたちが一つであるように、彼らも一つになるためであります。」（ヨハネ 17:22）

神の民は、様々な気質や組織をもって、教会に共に入れられたのである。心に受け入れられた神の真理は、生活を精錬し、向上させ、聖化させ、一人びとりの特有な見解と先入観を克服する働きをなすのである。全ての者はできる限り互いに近づくように働くべきである。神を愛し、真理のうちにあるこのお方の戒めを守る全ての者は、不信者にたいする感化力を持ち、勝利の喜びと勝利の喜ばしい歌を高らかに歌うために、キリストに魂を勝ち取る。……利己心は克服されキリストに対する溢れる愛が、このお方が死なれた魂を救うために、彼らが感じる重荷の中に明らかにされるのである。

わたしたちは目に見える教会のメンバーとして、また主のぶどう畑の働き人として、個人的な責任を感じるべきである。……人の体のそれぞれ異なった部分が身体を形づくるために一体になるように、またそれぞれが全体を支配している思考力に服従してその任務を果たすように、キリストの教会のメンバーは一つの均整の取れた全体のうちに一体になるべきである。もし世が教会の中に完全な調和が存在していることを見るならば、それは彼らがクリスチャンの宗教の方を選ぶための力強い証拠となるであろう。意見の相違、悲しい不和、そして取るに足りない教会の試練はわたしたちの贖い主を辱める。もし自己が神に明け渡されるならば、これらはみな避けることができるのである。（ﾊﾞｲﾌﾞﾙｴｺｰ 1888 年 9 月 1 日）

主は、世に広く行き渡っている道徳的暗闇のただ中にあって、わたしたちが光であるよう望んでおられる。わたしたちは軽率で軽薄な者となるべきではなく、中身のある品性の堅固さを持たなければならない。どれほど信仰が持ち込まれ、どれほど互いへの愛が存在すべきであろうか。もしわたしたちが神に近づくならば、わたしたちは互いに近づくのである。わたしたちは霊の一致に入ることなく、同じ十字架に近づくことはできない。キリストは、ご自分と御父が一つであられるように、弟子たちが一つとなるようにと祈られた。わたしたちは霊においてまた理解において、一つとなるように求めるべきである。わたしたちは、神が御子にあって栄光を受けられたように、わたしたちにあっても栄光をお受けになることができるために、一つになることを求めるべきである。そして神はご自分の御子を愛されるように、わたしたちを愛されるのである。しかし、真理がわたしたちの意見と合わないからといって、また自分たちの兄弟が理解しているように何かを理解することによって彼と一致することを恐れて、わたしたちが真理のあら捜しをし、欠点を探すとき、神はご自分の御子を愛されるようにわたしたちを愛することがおできになるであろうか。神はご自分の子供たちが一つとなることを計画しておられる。もしこの一致が存在しさえするなら、それは神の子供たちのうちに表されている神の力について、世に語るのである。（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1890 年 3 月 4 日）

6月11日

完全に一つとなる

「わたしが彼らにおり、あなたがわたしにいますのは、彼らが完全に一つとなるためであり、また、あなたがわたしをつかわし、わたしを愛されたように、彼らをお愛しになったことを、世が知るためであります。」（ヨハネ 17:23）

教会関係は軽く見なされるべき事柄ではない。すべての信者は自分が神の教会とつながる際、全心を尽くしているべきである。教会の繁栄が彼の第一の関心となるべきである。彼が、神の民との自分のつながりを、自分自身にとっての祝福よりはむしろ、教会にとって祝福となるようにすべきだという聖なる義務があることを感じない限り、教会にとっては彼がいないほうがずっとよいのである。しかし、だれも自分たちのタラントが少ないから、あるいは自分たちの機会が限られているからといって、傍観する必要はない。だれでも、自分の能力内で、神のみ事業のために何かをすることができるのである。彼らは互いに相和し、完全に調和して進みながら、自分たちの生活と品性のうちにキリストの教えを例証することができる。彼らはまた、小さな自己否定によって教会の財政上の重荷を負う助けをすることができるのである。彼らはそうせずに、自由に利益を受け、教会関係の特権を分かち合うことができると感じるべきではない。……

キリストは、一致とクリスチャンの交わりがご自分のみ事業の成功のために必要であることをご覧になったので、ご自分の弟子たちにこれらの特質を培うように命じられた。（ﾊﾞｲﾌﾞﾙｴｺｰ 1888 年 9 月 1 日）

神の勧告と調和して、また兄弟たちと一致して働く 1 人は、神に依存し、働きの全般的な計画で、調和して行動する必要を悟らない 10 人よりも、良いことをより能率的になすことができるのである。（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1888 年 5 月 29 日）

キリストが一致の上に置かれた重要性について考えて見なさい。このお方は、ご自分とその御父の間に存在している一致が、ご自分に従う者の中に存在することができるように、そして神が、ほんとうに、罪人を救うために御子を世にお送りになったということを世が知ることができるようにと祈られた。この祈りはどのように答えられるであろうか。すべての信者が悪を考えたり、悪を語ったりすることをやめることによってである。

主は、ご自分の僕たちが互いを扱うにあたって、ご自分の寛容を示すことを望まれる。たとえあなたにとってはとがめに値するように思われたとしても、一つといえども、とがめや非難の言葉を語ったり、書いたりしてはならない。不平を聞くことを拒みなさい。偏見に対して心を閉ざしなさい。あなたの唇から悪い憶測の言葉が漏れることがないようにしなさい。神は自分の兄弟たちを訴える者たちによって、名誉を汚されるのである。神の愛の泉から流れ出る愛によって、妬みが消されるようにしなさい。悪い想像には、しばしば考えたり、繰り返したりする時間を費やす価値はない。（太平洋連合記録 1902 年 3 月 13 日）

6月12日

このお方の栄光を見る準備をする

「父よ、あなたがわたしに賜わった人々が、わたしのいる所に一緒にいるようにして下さい。天地が造られる前からわたしを愛して下さって、わたしに賜わった栄光を、彼らに見させて下さい。」（ヨハネ17:24）

キリストはわたしたちが勝利者として、ついに天に入ることを望まれる。ご自分が人類に常に与えられる恵みを通して、このお方は、民が永遠にご自分と住むために彼らを準備しておられる。この準備を、このお方に従うことを選ぶすべての者は受けることができる。（ｻｲﾝｽﾞ・ｵﾌﾞ・ﾀｲﾑｽﾞ 1903年1月14日）

もしわたしたちがついに天を得ることができるとすれば、それはただ自己放棄とキリストの思いを受けることによってである。誇りと自己満足は十字架に付けられなければならず、その空間は霊と神の力によって満たされなければならない。わたしたちは永遠の命のために要求されている値を喜んで払うであろうか。わたしたちは座して代価を計算し、天国には、自己に死に、自分の意志を神の御心へ完全に一致させるという犠牲を払う価値があるという結論を出す準備ができているだろうか。わたしたちが喜んでそうするまでは、神の恵みの変化はわたしたちの上に表されないのである。わたしたちが、自分たちの空にされた性質を神に差し出すとき、このお方はご自分の聖霊によって、自己放棄によって作られた空間を満たされ、わたしたちにご自分の満ち満ちたものを与えられるのである。主はわたしたちが滅びるのを望まれない。このお方はご自分の奉仕にわたしたちの全てを捧げるよう望まれるのである。なぜならこのお方はわたしたちが祝福されることを望む以上に、わたしたちを祝福することを望まれるからである。このお方は、わたしたちがキリストのうちに宿り、このお方の祝福を受け、わたしたちが生きている間それを撒き散らすようにと望んでおられるが、それはわたしたちが祝福された永遠を楽しむことができるためである。人生は短い。しかし永遠は果てしないのである。（同上1892年11月21日）

主は、ご自分を信頼する子供たちのために大いなることをなそうと待っておられる。わたしたちは永遠の世において、キリストと共に住むことを期待するのだろうか。それならば、この地上でこのお方と共に住まなければならない。それは、あらゆる試練と試みの時に、このお方がわたしたちを助けることができ、また天の雲に乗ってこられるこのお方の再臨のために、わたしたちを準備させるためである。このお方は行いに応じて、それぞれに報いるのであり、すべての隠れたわざは裁かれるのである。その時わたしたちは、神の口から出る一つ一つの言葉によって生きていた者たちだけが救われることを見出すのである。……わたしたちは、確かに神のみ働きをしているかどうか、聖書全体を注意深く研究しなければならない。キリストの麗しさと恵みがわたしたちの品性に編みこまれなければならない。わたしたちは、自分たちがしているように、キリストを自分たちの生活からこれほど切り離しているのに、天においてこのお方との交わりに適合することはできないのである。このお方は天の全てのすべてであられるべきであるから、地上でわたしたちの全てのすべてでなければならない。（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1891年5月5日）

6月13日

わたしたちのうちにあるキリストの愛

「正しい父よ、この世はあなたを知っていません。しかし、わたしはあなたを知り、また彼らも、あなたがわたしをおつかわしになったことを知っています。そしてわたしは彼らに御名を知らせました。またこれからも知らせましょう。それは、あなたがわたしを愛して下さったその愛が彼らのうちにあり、またわたしも彼らのうちにおるためであります。」（ヨハネ 17:25, 26）

兄弟姉妹方よ、あなた方は自分たちが世の光であることを自覚しているだろうか。あなた方は、家庭においての自分たちの言葉と態度によって、輝かしい道筋を天国に向かって残しているだろうか。世の光であるとはどういうことだろうか。それは神を自分の導き手とし、聖天使を道連れとし、上から自分の上に輝いている光を他の者たちに反射するということである。しかし、もしあなた方がクリスチャンの礼儀、寛容、また愛を自分の家族のなかで行うことを怠るならば、神と聖天使は深く悲しんで立ち去り、あなたがたは世の光である代わりに、闇のやからなのである。

キリストの恵みを通して、つねに自分自身を制御することは可能である。もしあなたが良く思われたいと非常に願っている大事な友人が自分の家に来るとしたら、あなたはいらだったり小言を言ったりはしないだろう。そうではなく、あなたは自分の言葉と行動を制御して、あらゆる面で彼の尊敬と信頼を得るようなふるまいをするであろう。わたしたちは同じ性質を持つ自分たちに大切な人々の前や、あるいはイエスと天の御使いの前で気をつける以上に、さほどよく知らない人の前でもっと気をつけるのであろうか。そんなことは断じてあってはならない。

ある女の人が以前わたしたちの家族と九年間住んでいたが、その間わたしたちは、彼女の唇から一度もいらだった言葉また軽々しい表現を聞かなかった。そして、彼女はわたしが今まで会ったことのある人の中で、最も快活な人であった。彼女の生活は暗闇と憂鬱の生活でもなく、軽率で浅はかな生活でもなかった。この点に関して、わたしたちの生活は彼女の生活のようにならなければならない。神は、わたしたちが雲の下で生きるようにと思っておられるのではない。そうではなくこのお方の御顔の光のうちに生きるようにと思っておられるのである。

ある者たちは生まれつき無口な性格である。微笑みはめったに彼らの顔に見られない。そして彼らは人間というよりは銅像のように見えるのである。そのような者は自分の心を義の太陽に向かって開き、イエスから尊い光の光線を集めるべきであるが、それは他の者たちに反射することができるためである。兄弟姉妹方、神はあなた方がこの光をあなた方の心に持つことを求められるのである。その時あなた方は自分がいるところはどこにおいても、光の通路となるのである。太陽に向かって常にその顔を向けるひまわりのように、あなた方は絶えず光の源であるお方の方を見なければならないのであるが、それはあなた方ができる限りすべての光をつかむことができるためである。（ｻｲﾝｽﾞ・ｵﾌﾞ・ﾀｲﾑｽﾞ 1887 年 10 月 6 日）

ゲッセマネ

「さて、一同はゲッセマネという所にきた。そしてイエスは弟子たちに言われた、わたしが祈っている間、ここにすわっていなさい。そしてペテロ、ヤコブ、ヨハネを一緒に連れて行かれたが、恐れおののき、また悩みはじめて、彼らに言われた、わたしは悲しみのあまり死ぬほどである。ここに待っていて、目をさましていなさい」。そして少し進んで行き、地にひれ伏し、もしできることなら、この時を過ぎ去らせてくださるようにと祈りつづけ、そして言われた、アバ、父よ、あなたには、できないことはありません。どうか、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの思いではなく、みこころのままになさってください。それから、きてごらんになると、弟子たちが眠っていたので、ペテロに言われた、シモンよ、眠っているのか、ひと時も目をさましていることができなかったのか。」（マルコ 14:32-37）

救い主は一人で神と共にいることを願われたが、それはご自分が、祈りのうちに神と格闘することができるためであった。このお方の魂にのしかかった苦悩は、このお方が耐えなければならない肉体的苦悩ではなかった。このお方はご自分が耐えなければならなかった罪の不快な性質を感じられていた。このお方は破られた律法の刑罰に苦しみ、御父の怒りを負わなければならない。

ご自分の弟子から少し離れて、キリストはうつぶせになって祈られた。「わが父よ、もしできることでしたらどうか、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの思いのままにではなく、みこころのままになさって下さい」とこのお方は叫ばれた（マタイ 26:39）。

このお方を囲んでいた深まりゆく暗闇のなかで、あらゆる支えがキリストから落ちていくように思われた。そしてこのお方の魂は、人間の同情を切望された。長時間にわたっての言葉では言い表せない激しい苦痛の重荷に悩まされて、このお方は身を起こして、ご自分が残された三人の友達のいる場所へと暗闇の中を歩まれた。しかしこのお方は彼らが眠っているのを見出された。……

この最も重要な時―イエスが彼らに、ご自分と共に見張っているようにとの特別な要求をされたときに、弟子たちは眠ってしまった。キリストは、彼らがご自分にとって力となることができるように、また彼らがその夜目撃すべき出来事のために、そして彼らが受けるはずであった教訓が永久に彼らの記憶に刻み込まれるようにと、彼らをご自分と共に連れてこられた。これは彼らの信仰が無くならないためではなく、彼らの眼前にある試練に備えて力づけられるために必要であった。しかしキリストと共に見張っている代わりに、彼らは眠ってしまった。たった数時間前に、自分は主のために苦しみ、必要なら死にますと宣言した熱心なペテロでさえも、イエスが彼の同情と祈りを必要とされていたときに眠っていた。……

闇の勢力は神の御子を取り囲んでいた。なぜなら失われた世界の運命が量りにかかっていたからである。（ｴｰｽ・ｲﾝｽﾄﾗｸﾀｰ 1901 年 4 月 11 日）

6月15日

見張っているようにとの訴え

「誘惑に陥らないように、目をさまして祈っていなさい。心は熱しているが、肉体が弱いのである。」（マルコ 14:38）

人の思いはわたしたちの贖い主の魂を苦しめた、言葉で表すことのできない苦悶を、想像することができない。神の聖なる御子は負うべきご自分の罪または悲しみを持っておられなかった。このお方は他の者たちの悲しみを負っておられた。……神聖な同情を通してこのお方はご自分を人と結びつけ、人類の代表者として、ご自分を違反者として扱われるために差し出される。このお方は、わたしたちの罪によってわたしたちに開かれている悲哀の深淵を覗き込まれ、神からの人の離脱という大きな淵に橋をかけることを申し出られる。……

御父の律法に対する人の違反のゆえに、このお方の罪の重荷は非常に大きかったので、人性はそれを負うには十分ではなかった。殉教者が負うことのできる苦しみは、キリストの苦悶とは比較にならない。彼らの苦しみには神のご臨在があったが、御父のみ顔はこのお方の愛する御子からは隠されていた。（ﾊﾞｲﾌﾞﾙｴｺｰ 1892 年 8 月 1 日）

自分たちの神なる主が、あれほどの表現しがたい精神的苦悶に耐えておられたときに、自分たちの目を閉じて眠ってしまい、まどろんで自分たちの感覚を鎖でつないでしまったとは、弟子たちは何と残酷だったことであろう。もし彼らが見張り続けていたならば、彼らは神の御子が十字架上で死なれるのを見たとき、自分たちの信仰を失うことはなかったのである。この重要な夜の見張りは、気高い精神的な苦悩と祈りによって際立っているべきであった。それが、彼らに神の御子の言いようのない苦悶を目撃する力を与えるはずであった。それは、彼らが十字架上のこのお方の苦悩を見なければならないとき、このお方がゲッセマネの園で耐えられた強烈な苦悶の性質を幾分か理解するように彼らを準備させたはずであった。そして彼らは、このお方がご自分の苦しみ、死、また復活に関して語られた言葉をもっと良く思い出すことができ、そしてつらい耐え難い暗黒のときの只中にあって、望みの光線が暗闇を照らし、彼らの信仰を支えたであろうに。（教会への証 2 巻 205, 206）

〔今日の多くの者たち〕は自己認識と自制の重要性を理解しない。彼らは誘惑に陥らないように、目を覚まして祈らない。もし彼らが目を覚ましているなら、彼らは、誘惑によっておそらく攻撃されるはずの自分たちの弱点を良く知るようになるであろう。用心深さと祈りによって、彼らの弱点は長所となるほどまでに警戒されうるのである。そして彼らは打ち負かされることなしに誘惑に遭うことができるのである。キリストに従う者はみな、日毎に自分自身を吟味するべきであるが、それは自分の品行に完全に精通することが出来るためである。ほとんど全ての者たちに自己吟味の怠慢があるのである。（同上 511）

苦い杯

「〔イエスは〕また二度目に行って、祈って言われた、わが父よ、この杯を飲むほかに道がないのでしたら、どうか、みこころが行われますように。またきてごらんになると、彼らはまた眠っていた。その目が重くなっていたのである。それで彼らをそのままにして、また行って、三度目に同じ言葉で祈られた。」（マタイ 26:42-44）

世の罪の重荷がキリストの上に置かれていた間、ご自身と御父との一致についての疑いがこのお方の魂をかき乱した。この恐ろしい試練のときに、このお方は人間の同情と友情でさえも切望された。二度目にこのお方は地から起きあがって、ご自分の弟子たちが留まっていたところに行かれた。しかしこのお方はまたもや彼らが眠っているのを見出されたのであった。彼らは深い眠りにおちいっていたのではなかった。彼らは自分たちの主の苦しみと苦悶を部分的に感じていたのであった。イエスは少しの間、優しく彼らの上にかがまれ、愛と憐れみの入り混じった感情をもって彼らをじっとご覧になった。

弟子たちはまどろみから目覚めて、自分たちの主人が、彼らが今まで目のあたりにしたことのなかったほどの、精神的また肉体的苦悶の状態で彼らのそばに立って見下ろされているのに気づいた。彼らはこのお方の青ざめた顔の悲しみと苦悶、また額に血の汗があるのを見た。「彼の顔だちは、そこなわれて人と異なり、その姿は人の子と異なっていたからである」（イザヤ 52:14）。弟子たちは自分たちが眠ってしまい、自分たちの苦しんでいる主と共に祈り、同情することができなかったことを深く悲しんだ。彼らは悲しみと驚きによって口がきけなくなったが、自分たちの上にのしかかっていた昏睡状態を打破することができないように思われた。

ふたたび闇の勢力が圧倒的な勢いでキリストに迫った。ご自分の弟子たちを最も優しい憐れみのまなざしでご覧になってから、このお方は彼らから離れ、三度目に祈りのうちにひざまずかれた。神なる受難者は、この神秘的で恐ろしい争闘に驚愕して身震いされた。このお方はご自分の魂の重荷を激しい叫びと涙とをもって注ぎ出された。このお方の魂は、人間が誰一人として耐え、生きることができない苦悶によって押しつけられていた。イエスは、ほとんどの者がご自分の愛を感謝しないのをご存知であったが、このお方は、罪を犯した人間のためにこれらすべてを自発的に苦しまれたのであった。……

世の運命が決定されるべき恐ろしい瞬間がやってきた。人類の運命は、はかりの上でゆれていた。神の御子は苦い杯から飲むことを今でも拒否することができた。このお方は額の血の汗をふいて、人を彼らの罪のうちに滅びるがままにしておくこともおできになった。無限の神の御子が屈辱と苦悶の杯を飲まれるだろうか。罪なきお方が不義な者たちを救うために罪ののろいに苦しまれるだろうか。（ﾊﾞｲﾌﾞﾙｴｺｰ 1892 年 8 月 1 日）

6月17日

わたしたちのために血の汗を流された

「そのとき、御使が天からあらわれてイエスを力づけた。イエスは苦しみもだえて、ますます切に祈られた。そして、その汗が血のしたたりのように地に落ちた。」（ルカ 22:43, 44）

イエスが祈りのうちに頭を下げておられるとき、このお方は霊の苦悶のうちに血のしたたりの汗を流された。大いなる暗闇の恐怖がこのお方を囲んだ。なぜなら世の罪がこのお方の上にあったからである。このお方は御父の律法の違反者として、人の代わりに苦しんでおられた。神の光はこのお方の目の前から消えて行き、このお方は闇の勢力の手中に渡されていた。このお方は魂の苦悶のうちに、冷たい地面の上にうつぶせになられた。キリストは罪を犯した人間から苦悩の杯を引き受けられた。そしてそれをご自分が飲まれ、その代わりに人に祝福の杯を与えることを申し出られたのであった。……

今や人類の歴史が世の贖い主の前に現れる。主は罪の力と、人が自分を救うには全く無力であることをお知りになる。失われた世界の災いと嘆きがこのお方の前に現れる。このお方は、世の差し迫った運命を見て決心される。ご自分がどんなに犠牲を払ってでも、主は人類を救おうとされる。滅びつつある幾百万の人がイエスを通して永遠の生命を受けられるようにと、イエスは血のバプテスマを受けられる。主が純潔と幸福と栄光に満ちた天の宮廷を去られたのは、失われた一匹の羊、罪過によって堕落した一つの世界を救うためであった。だから主は、ご自分の使命から離れようとはなさらない。

決心されると、イエスは、それまでわずかに体をもたげておられた地面に、今にも死んでしまわれるかのようにばったりと倒れておしまいになった。失神したようになっておられる主の頭をやさしく手でささえ、人の子と異なって見えるほどにそこなわれたその額をふいてさしあげるはずの弟子たちはその時どこにいたのであろう。わたしたちの救い主はひとりでさかぶねを踏まれ、もろもろの民の中に主と事を共にする者はなかった。天でキリストの御心を行っていた天使たちは、喜んでこのお方を慰めたであろう。しかし、彼らは何をすることができるだろう。彼らには、とてもそれほどの悲しみ、それほどの苦悶をやわらげることはできなかった。彼らは堕落した世界の罪を感じたことがなく、彼らは驚いて自分たちの愛する主人であるお方が苦悩によってうつぶせになっておられるのを見つめていた。

御父は、ご自分の御子の震えるみ手と青ざめた唇から杯を取り除くことはされないが、神なる受難者を力づけるためにその御前から一人の天使を送られる。その天使は神の御子を冷たい地面から起こして、このお方をその御父からの愛のメッセージによって慰める。このお方は力づけられる。このお方はご自分が贖いを受け入れるすべての者たちのために永遠の喜びを獲得しているという確証を持たれる。（ﾊﾞｲﾌﾞﾙｴｺｰ 1892 年 8 月 1 日）

上からの力

「〔イエスは〕三度目にきて〔弟子たちに〕言われた、まだ眠っているのか、休んでいるのか。もうそれでよかろう。時がきた。見よ、人の子は罪人らの手に渡されるのだ。立て、さあ行こう。見よ。わたしを裏切る者が近づいてきた。」（マルコ14:41, 42）

天使の輝かしい光景は、弟子たちの目をくらませた。彼らは変貌の山、宮の中でイエスをとりまいた栄光、雲の中から語られた神の声を思い出した。その同じ栄光が現されたので、彼らはもはや主について心配しなかった。なぜなら、主は神の守りのうちにおられ、天使がこのお方を敵から保護するために現れたからである。彼らは疲れと耐えがたい眠気によって、再び無意識状態におちいった。

救い主は身を起こされ、ご自分の弟子たちを三度目に探され、彼らがぐっすり眠り込んでいるのを見つけられた。しかしこのお方の言葉が彼らを起こした。「まだ眠っているのか、休んでいるのか。見よ、時が迫った。人の子は罪人らの手に渡されるのだ」（マタイ 26:45）。

これらの言葉を語っておられる間に、このお方を捜し求めている暴徒たちの足音が聞こえた。ユダが先頭に立って、大祭司がすぐあとに続いていた。イエスはご自分の敵たちが近づいてこられると、ご自分の弟子たちの方を振り向かれて、「立て、さあ行こう。見よ、わたしを裏切る者が近づいてきた」と言われた（マタイ 26:46）。救い主の容貌は穏やかな威厳の表情をおびていた。このお方が裏切り者に会うために踏み出されたとき、先程までの苦悶の跡は少しも見られなかった。（現代の真理 1885 年 12 月 17 日）

ゲッセマネにおける恐ろしい時間は過ぎ去った。わたしたちの神なる救い主は、杯を最後まで飲み干すことを受諾された。人のために、このお方は誘惑の時に勝利された。平穏と平和が今、青ざめ血のついた御顔に見られた。（ﾊﾞｲﾌﾞﾙｴｺｰ 1892 年 8 月 15 日）

ゲッセマネの園における肉体的苦悩と精神的苦悶の時に、キリストに与えられた力は、愛するお方のみ名のために苦しむ者たちに与えられてきたし、これからも与えられるのである。イエスに与えられたのと同じ恵みと慰め、また死すべき人間の堅固さにまさるものが、困惑と苦しみに遭い、サタンの手下によって投獄と死をもって脅かされる一人ひとりの信じる神の子に与えられるのである。キリストに信頼する魂が、滅びるがままに放っておかれたことは一度もなかった。拷問台や火刑、また多くの残酷な方法は肉体を殺しても、キリストと共に神のうちに隠された生命に触れることはできないのである。（ｻｲﾝｽﾞ・ｵﾌﾞ・ﾀｲﾑｽﾞ 1897 年 6 月 3 日）

6月19日

接吻による裏切り

「そして、イエスがまだ話しておられるうちに、そこに、十二弟子のひとりのユダがきた。また祭司長、民の長老たちから送られた大ぜいの群衆も、剣と棒とを持って彼についてきた。イエスを裏切った者が、あらかじめ彼らに、『わたしの接吻する者が、その人だ。その人をつかまえろ』と合図をしておいた。彼はすぐイエスに近寄り、『先生、いかがですか』と言って、イエスに接吻した。」（マタイ 26:47-49）

ユダは、キリストがご自分に従ってくる者たちにお教えになる、柔和と心のへりくだりという日毎の教訓をキリストから学び損ねたので、清められた者たちのなかに位置を占め損なったのである。彼は他の弟子たちがやっと学び、そうすることによって神の相続人またイエス・キリストとの共同相続人となった信仰の教訓を学び損ねたのである。（ｻｲﾝｽﾞ・ｵﾌﾞ・ﾀｲﾑｽﾞ 1894 年 12 月 24 日）

ユダは誘惑され試みられたが、これらの誘惑を超越しなかったので、支えを失い、ついには自分の主を裏切るまでになったのである。キリストは、ユダが他の弟子たちと伝道旅行に行くことを許されたが、これらの機会においてユダはしばしば優越精神を表したのであった。彼は自分の兄弟たちの上に権威を振るうことを求めた。この抑制されていない精神は、しまいには自分の救い主を裏切りの接吻をもって裏切ることさえするようになるまで、敵が彼の心と思いに働きかける道を開いたのであった。今日、神の民と公言している者たちの間で、これと同じ道を歩んでいる者たちがいる。そして彼らが改心しない限り、彼らはいつか、現代のための神の働きに対する公然とした敵と共に数えられるのである。（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1909 年 9 月 9 日）

ウェスレーは、こう言った。「キリストの福音の最大の敵の中には、公然とあからさまに、『律法をさばき』『律法をそしる』人々があり、また、律法の中の一つ（最大のものであれ最小のものであれ）というのではなく、すべての戒めを、一撃のもとに破壊する（廃止する、解消する、その義務を解く）ことを人々に教える者がある。……この強力な欺瞞に伴う状態で最も驚くべきことは、それに没頭している人々が、キリストの律法をくつがえすことによって、キリストをあがめていると信じ、彼の教義を廃しながら、彼の務めを大いならしめていると信じこんでいることである。実に彼らは、ちょうどユダが、『「先生、いかがですか」と言って、イエスに接吻した』ようにして、主をあがめているのである。キリストは、このような人々に対して、同じく『あなたは接吻をもって人の子を裏切るのか』と言われることであろう。彼の血について語りながら、彼の冠を取り去り、福音の進展という名目のもとに、彼の律法のどの部分であれ軽々しく廃することは、接吻をもって彼を裏切ることにほかならない。直接であれ間接であれ、服従のなんらかの部分を廃するというやり方で信仰を説こうとする者、また、神の戒めのどんなに小さいものでも、それを取り消したり、または少しでも弱めたりして、キリストを宣べ伝える者は、この非難を免れることはできない。」（各時代の大争闘上巻 335）

6月20日

同情する天使たち

「イエスは [ユダ] に言われた、友よ、なんのためにきたのか。このとき、人々は進み寄って、イエスに手をかけてつかまえた。すると、イエスと一緒にいた者のひとりが、手を伸ばして剣を抜き、そして大祭司の僕に切りかかって、その片耳を切り落した。そこで、イエスは彼に言われた、あなたの剣をもとの所におさめなさい。剣をとる者はみな、剣で滅びる。それとも、わたしが父に願って、天の使たちを十二軍団以上も、今つかわしていただくことができないと、あなたは思うのか。」(マタイ 26:50-53)

それならばどうして、〔イエス〕はご自分とわたしたちを救われないのかと弟子たちは思った。そして彼らの無言の思いに答えて、このお方は「しかし、それでは、こうならねばならないと書いてある聖書の言葉は、どうして成就されようか」と仰せられた (マタイ 26:54)。

神の下では天使たちは万能である。彼らは強力であり、強さに秀でている。あるときには、キリストの命令に従って、一晩でアッスリヤ軍の 18 万 5 千人を殺害した。彼らはまもなく裁きをもってこの地に訪れることができるし、またそうするのである。天使が矢継ぎ早に次々と、地上の住民たちの上に怒りの杯を注ぎ出すのである。天使たちは、キリストの裁判の恥ずべき光景を見たとき、どれほどたやすく神の敵どもを全滅させることによってその憤りを表明できたことであろう。しかし彼らはそうするように命じられなかった。(ｻｲﾝｽﾞ・ｵﾌﾞ・ﾀｲﾑｽﾞ 1900 年 1 月 17 日)

イエスがご自分の敵からご自身を救い出さないで、捕らえられ縛られるままになるのを弟子たちが見たとき、彼らはこのお方がご自身と彼らにこの屈辱をお許しになったことにつまずいた。彼らはたった今、このお方がご自分を捕らえようとしてやってきた者たちを地に倒れさせ、ペテロが切り落とした僕の耳を癒すことのうちに、このお方の力の提示を目の当たりにしたのであった。そして彼らはもしこのお方が選びさえすれば、この残忍な暴徒からご自分を救い出すことができることを知っていた。彼らはこのお方がそうなさらないことを非難した。そしてこのお方の不可解な行動に屈辱を感じ恐怖におびえて、彼らはこのお方を捨てて逃げ去った。キリストはこの逃亡を予見しておられ、二階座敷において「見よ、あなたがたは散らされて、それぞれ自分の家に帰り、わたしをひとりだけ残す時が来るであろう。いや、すでにきている。しかし、わたしはひとりでいるのではない。父がわたしと一緒におられるのである」(ヨハネ 16:32) と言われる事によって、この時に彼らが取る行動について、彼らに警告されたのであった。(預言の霊 3 巻 105)

なんという悲しみと嘆きが神の御使いにあったことであろう。聖天使の多くの集団が、一団ごとに背の高い司令官である天使を先頭にして、この光景を目撃するために送られた。(同上 1 巻 48)

6月21日

キリストの言葉を曲解した偽証

「それから、イエスを大祭司のところに連れて行くと、祭司長、長老、律法学者たちがみな集まってきた。

……さて、祭司長たちと全議会とは、イエスを死刑にするために、イエスに不利な証拠を見つけようとしたが、得られなかった。多くの者がイエスに対して偽証を立てたが、その証言が合わなかったからである。ついに、ある人々が立ちあがり、イエスに対して偽証を立てて言った、わたしたちはこの人が『わたしは手で造ったこの神殿を打ちこわし、三日の後に手で造られない別の神殿を建てるのだ』と言うのを聞きました。しかし、このような証言も互に合わなかった。」（マルコ 14:53, 55-59）

キリストはご自分の体の神殿に関して、それを打ちこわし、それを三日のうちに起こすことができると言われた。これらの言葉はこのお方の言葉を聞いている者たちに、ユダヤの神殿について言われたものと理解された。祭司たちは、イエスが言われたすべてのことについて、イエスに不利に用いることができるものは、これ以外に見つけることができなかった。ローマ人は神殿の再建と装飾に従事し、この神殿を科学と芸術の作品として非常に誇りにしていた。そこで祭司たちは、身分のいやしいイエスが、神殿がこわされたら三日のうちに建てることができると宣言したことが証明されれば、彼らが憤慨するものと期待した。この点において、ローマ人もユダヤ人も、またパリサイ人とサドカイ人も一致することができた。なぜなら神殿に対しては、みな非常な崇敬の念を抱いていたからである。

このほかに彼らは、イエスが反逆を扇動して別の政府を確立しようとした罪があると証言させるために、偽証人たちを買収した。彼らはこれがローマ人の不安をさらにかきたて、望むところの目的を達成するよう願った。しかし、これらの証人たちが召喚されたとき、彼らの証言はあまりにもあいまいで矛盾していたので役に立たなかった。尋問の結果、結局彼らは自らの発言が偽りであることを立証することになった。イエスに対してあくまで告訴し続けるのは無理だということが、人々に明らかになってきた。救い主のご生涯はまったく欠点がなく、このお方の教えが非常に純粋だったので、いずれにせよ、妬みも悪意も曲解する余地をほとんど見出すことができなかった。

ついに、証拠が他の証人たちほどには矛盾していない二人の証人が見つかった。彼らのうち一人は、自分の名誉をいくらかの金銭で売り払った堕落した者で、キリストについてあたかも自分と同等であるかのように話した。……預言の比喩的な言葉のうちに、イエスはご自分の死と復活、ご自分の闘争と勝利をこのように預言されたのである。しかしこのお方の敵は、このお方の言葉を彼らの目的に都合が良いように曲解した。イエスのみ言葉は真理であり、真実であった。証言は偽りであり、悪質であった。（預言の霊 3 巻 118, 119）

6月22日

キリストの身分が立証される

「ここで大祭司が立ちあがって、まん中に進み、イエスに聞きただして言った、何も答えないのか。これらの人々があなたに対して不利な証言を申し立てているが、どうなのか。しかし、イエスは黙っていて、何もお答えにならなかった。大祭司は再び聞きただして言った、あなたは、ほむべき者の子、キリストであるか。イエスは言われた、わたしがそれである。あなたがたは人の子が力ある者の右に座し、天の雲に乗って来るのを見るであろう。すると、大祭司はその衣を引き裂いて言った、どうして、これ以上、証人の必要があろう。あなたがたはこのけがし言を聞いた。あなたがたの意見はどうか。すると、彼らは皆、イエスを死に当るものと断定した。」（マルコ 14:60-64）

キリストはカヤパが、彼が占めている地位には値しない者であることを知っておられた。しかしこれを知りながら、このお方は大祭司の要求にお応えになった。このお方は、ご自分が神によってその任務を受けたことをご存知であった。そしてその時そこで、ご自身に栄光を帰すこともおできであった。このお方はご自分の裁判官たちを怖気づかせるような力を、行使することもおできになったのである。しかし、このお方のために肉の体が備えられていた。その有様は人と異ならず、このお方はおのれを低くされた。非難され罪に定められるために、真の大祭司なるお方が偽りの大祭司の前に立たれたのであった。……

このような重大な結果を伴っていたために、これはキリストにとってご生涯で最もすばらしい瞬間の一つであった。このお方はいまやすべてのごまかしが一掃されねばならないことを悟られた。このお方は神と一つであるという宣言はすでになされた。このお方は公然と、ご自分は神の御子であり、ユダヤ人が長年待望していたお方であることを宣言なさったのであった。

「あなたの言うとおりである。しかし、わたしは言っておく。あなたがたは、間もなく、人の子が力ある者の右に座し、天の雲に乗って来るのを見るであろう」（マタイ 26:64）。その日には、キリストが裁判官になられるのである。すべての隠れた事柄は、神の御顔の光のうちに置かれる。そのときには、キリストを拒んだ者たちと、このお方を個人的救い主として受け入れた者たちの間には、何という相違があることであろう。その時罪人たちは、自分たちの醜悪さを覆ったりやわらげたりする陰もなく、自分たちの罪を見るのである。その光景のあまりの恐ろしさに、彼らは小羊の怒りから逃れることさえできるなら、山の下または海の深みに隠されることを願うようになる。しかし神のうちにキリストと共に命が隠されている者たちは、「わたしはピラトの法廷において罪に定められ、十字架につけられるために祭司と指導者たちに引き渡されたお方を信じています。罪人であるわたしを見ないで、わたしの仲保者を見てください。このお方がわたしのために示された愛に値するものは、わたしのうちに何もありません。しかし、このお方はわたしのためにご自分の命を与えて下さいました。イエスのうちにわたしを見てください。このお方は、わたしがこのお方のうちにあって神の義とされることができるようにと、わたしのために罪となられました」と言うことができるのである。（ユース・インストラクター 1900 年 5 月 31 日）

6月23日

ペテロのへりくだり

「人々は中庭のまん中に火をたいて、一緒にすわっていたので、ペテロもその中にすわった。すると、ある女中が、彼が火のそばにすわっているのを見、彼を見つめて、この人もイエスと一緒にいましたと言った。ペテロはそれを打ち消して、わたしはその人を知らないと言った。しばらくして、ほかの人がペテロを見て言った、あなたもあの仲間のひとりだ。するとペテロは言った、いや、それはちがう。約一時間たってから、またほかの者が言い張った、たしかにこの人もイエスと一緒だった。この人もガリラヤ人なのだから。ペテロは言った、あなたの言っていることは、わたしにわからない。すると、彼がまだ言い終らぬうちに、たちまち、鶏が鳴いた。主は振りむいてペテロを見つめられた。そのときペテロは、『きょう、鶏がなく前に、三度わたしを知らないと言うであろう』と言われた主のお言葉を思い出した。そして外へ出て、激しく泣いた。」（ルカ 22:55-62）

ペテロはキリストを守るためには武器を取る用意ができていたが、このお方があざけりと嘲笑の的になられたとき主を認めるほどの勇気はなかった。……ペテロはこの誘惑について警告されてきたが、彼は自分の危険を悟らず、それゆえにこの試みに対して自分自身を準備していなかった。彼は自信に満ちて、どんな誘惑にも耐えることができると考え、すべての者がつまずいても、自分は主と獄や死までも行く用意ができていると保証したのであった。彼がキリストを罵倒する者たちと共にいたとき、彼は敵の陣地に自分の身を置いたので、倒れたのであった。彼が三度目に自分の主を拒んだときに、鶏が鳴いた。そして、イエスは特別な悲しみをうかべてそのまなざしをペテロに向けられた。そして、彼に語られたキリストの言葉が直ちに思い起こされた。そのまなざしの記憶は、彼の全生涯にわたってペテロを離れなかった。自分が罪深くも誇らしげに話したこと、自分の主が警告して下さったこと、自分が救い主を否定したこと、すべてが電光のひらめきのように思い起こされた。苦しみ、侮辱されている自分の主を悲しげに一目見ると、彼は偽りの告訴と非難の騒音から急いで立ち去り、宮殿から大急ぎで出て、まっしぐらに暗闇へと突き進み、激しく泣きながらゲッセマネへと急いだ。彼は自分の本当の姿を見始めた。記憶がまざまざとよみがえり、彼の罪は忌むべき光のうちに彼の前に描き出された。ペテロは数時間前にイエスが苦悶のうちに祈り、涙を流された場所に自らの身を投げ出し、そこでこの弟子はかつてなかったほど祈った。深い悔い改めと、激しい自責の念をもって、彼は許しを願い求めた。そして彼は改心した人として起き上がった。（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1891 年 4 月 7 日）

引き止められた天使たち

「イエスを監視していた人たちは、イエスを嘲弄し、打ちたたき、目かくしをして、言いあててみよ。打ったのは、だれかときいたりした。そのほか、いろいろな事を言って、イエスを愚弄した。」（ルカ 22:63-65）

〔天使たちは〕イエスを救いたいと思ったが、指揮者の天使は彼らをとどめて、これは人類のために払われる大きな代償で、死の能力をもっているサタンは、この完全な代償によって滅ぼされるのだと言った。イエスは、天使たちがこの屈辱の光景を見ているのをご存じだった。どんなに弱い天使でも、このあざける群衆をやすやすと倒して、イエスを救い出すことができるのだった。天父に願いさえしたら、天使たちがすぐに救ってくれることを、イエスは知っておられた。しかし救いの計画を実行するためには、イエスは悪人たちの暴力をしのばれねばならなかった。

イエスは、狂暴な群衆があらんかぎりの悪口雑言をあびせるのに、その前に柔和にへりくだって立っておられた。彼らはイエスの顔につばをはきかけた。それは彼らがいつかはその前から身をかくしたいと願うみ顔であり、また神の都を照らして太陽よりも明るく輝くみ顔なのであった。キリストは暴徒たちに怒った顔を向けられなかった。彼らは古い衣をイエスの頭にかぶせて目かくしをし、その顔をたたいて、「言いあててみよ。打ったのは、だれか」と叫んだ。天使たちはいきり立った。彼らは、すぐにもイエスを救助したいと思ったが、しかし指揮の天使たちにひきとめられた。（初代文集 291, 292）

救い主は、ご自分の周りにいる惑わされた魂、すなわち祭司や役人たちが自分たちの行動を是認していることがわかり、一切の自制を振り払った者たちに対して、報復の言葉や目つきを何一つ向けられなかった。

イエスは天の万軍がご自分の屈辱を目撃していること、またこのお方を助け出すために呼び出されれば、最も小さい天使でさえ一瞬にして無礼な群衆を追い散らし、ご自分を彼らの力から救い出すことができることをご存じであった。イエスご自身がご自分の神性の一瞥や一言で、興奮した群集を死んだ者のように撃つこともおできになったし、また宮を汚す者たちになさったように、彼らを震え上がらせてご自分の御前から追い払うこともおできになったのである。しかし、このお方が悪人の嘲笑と虐待を耐えるべきことは、贖いの計画の中にあり、このお方は人の贖い主となられたときに、こうしたすべてのことを承諾されたのであった。神の天使たちは、愛する主に対する侮辱の顔つき、ことば、行為を一つももらさず忠実に記録した。嘲笑したあげく、冷静な、青ざめたキリストの顔つきにつばを吐きかけた卑劣な人たちは、いつか太陽よりも明るく輝く栄光のうちにそのみ顔を見るのである。（預言の霊 3 巻 122, 123）

6月25日

むさぼりの結果

「夜が明けると、祭司長たち、民の長老たち一同は、イエスを殺そうとして協議をこらした上、イエスを縛って引き出し、総督ピラトに渡した。そのとき、イエスを裏切ったユダは、イエスが罪に定められたのを見て後悔し、銀貨三十枚を祭司長、長老たちに返して言った、わたしは罪のない人の血を売るようなことをして、罪を犯しました。しかし彼らは言った、それは、われわれの知ったことか。自分で始末するがよい。そこで、彼は銀貨を聖所に投げ込んで出て行き、首をつって死んだ。」（マタイ 27:1-5）

ユダは生活において、自分が公言する信仰を実行しなかった。彼は利己的な精神を培い、それは貪欲と不誠実へと成長し、自分の主人を銀貨三〇枚で売るようにと導いたのであった。彼は恐ろしい仕事を取り消すのには手遅れになるまで、自分がしていることを悟らなかった。彼は罪の結果を悲しんだが、その嘆かわしい性格を本当には自覚しなかった。（ｻｲﾝｽﾞ・ｵﾌﾞ・ﾀｲﾑｽﾞ 1897 年 2 月 4 日）

ユダの悲しい歴史はすべての者にとって教訓である。ユダはすばらしい機会に恵まれていた。彼は救い主の奉仕の全期間にわたって、キリストと共にいた。三年間、日々彼はこのお方の教えを聞き、このお方の驚くべき働きを目撃したのであった。彼がすべての利己心を捨てる気があったなら、主はご自分の御国を進展させるために、彼をお用いになったことであろう。しかしユダは利益を愛した。彼には思惑があった。彼は教会の財政を管理することができ、そうすることによってお金を増やすことができると考えた。彼の貪欲はますます強くなり、ついには自分の主を銀貨 30 枚で売るまでになったのである。

今日何と多くの者たちが、ユダのように自分たちの主を裏切っていることだろう。何と多くの者たちが世俗的利益のために原則を犠牲にしていることだろう。そのようにして彼らは、キリストをまたもや十字架につけ、さらしものにするのである。

生活の最大のことがらのみならず、最小のことがらにおいても、第一の質問は「何が神の御旨であろうか」であるべきである。キリストはご自分の子供たちに、自分たちからすべての利己心、すべての貪欲、すべての不純を取り除くようにと要求しておられる。「すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう」とこのお方は仰せになる（マタイ 11:28）。あなた自身をわたしの訓練にゆだねなさい。あなたの意志をわたしの意志に、あなたの道をわたしの道に従わせなさい。あなたの生命をわたしの生命と一つにさせなさい。そうすればあなたは永遠の命まで持ちこたえる宝を得るのである。

真の宗教は実験ではない。それはキリストを実際的に模倣することである。神は一人びとりをその働きの実際的な結果によって試され、個人個人の帳面をつけておられる。まもなく「あなたの会計報告を出しなさい」という要求が聞かれる（ルカ 16:2）。（同上 1902 年 2 月 19 日）

キリストの王国に戦いはない

「ピラトは……イエスを呼び出して言った、あなたは、ユダヤ人の王であるか。イエスは答えられた、あなたがそう言うのは、自分の考えからか。それともほかの人々が、わたしのことをあなたにそう言ったのか。ピラトは答えた、わたしはユダヤ人なのか。あなたの同族や祭司長たちが、あなたをわたしに引き渡したのだ。あなたは、いったい、何をしたのか。イエスは答えられた、わたしの国はこの世のものではない。もしわたしの国がこの世のものであれば、わたしに従っている者たちは、わたしをユダヤ人に渡さないように戦ったであろう。しかし事実、わたしの国はこの世のものではない。」（ヨハネ 18:33-36）

イエスは……ピラトにご自分は地上における王の誉れをねらう罪については無実であることをわからせようとなさった。ピラトは宗教世界の動揺し分裂した要素によって、困惑させられていた。そして彼の思いは、イエスが自分は真理についてあかしをするためにこの世に来たと宣言されたみ言葉を熱心にとらえた。犯罪者として召喚され、真理を持っていると主張しているこの人は、真理とは何か、またそれをどのように得られるかを知りたいという大きな熱望でピラトの心をかきたてた。「真理とは何か」と彼はイエスにたずねた。しかし彼は返事を待たなかった。興奮した群集の騒ぎが増し続けていた。彼らの我慢できない叫びは、彼の耳をいらだたせ、彼に自分の裁判官である立場を思い出させた。彼は法廷の入り口の向こうがわに立っていたユダヤ人たちのところに出てくると、「わたしには、この人には何の罪も見出せない」と断固とした声で宣言した（ヨハネ 18:38）。

霊感の筆につづられたこれらの言葉は、イエスに対するユダヤ人たちの告発における彼らの浅ましい不誠実と偽りについて永遠に世に対する証拠となるのである。異教の裁判官さえこの方の無実を宣言したのであった。（預言の霊 3 巻 132, 133）

キリストの王国に関する事柄においては、良心の無理強いや強制は許されていない。血は流されるべきではなく、どんな武力も用いられるべきではなく、神の国と神の義を選ばない者を投獄するために牢獄が開かれるべきではない。キリストは真理によって聖化されてきた心の自発的な奉仕だけをお受け入れになる。（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1895 年 3 月 26 日）

クリスチャンは自分たちの権利のために争う必要はない。彼らはキリストの旗の保護のもとに立つ。彼らは王の王、主の主の至上権を認めるべきである。彼らはその兄弟との間の困難な問題については、カイザルやピラトに訴えるべきではない。これらすべての事柄について帳面がつけられており、キリストはご自分の定められる時に、ご自分の選民の報復をなさるのである。神は自分の兄弟と神のみ事業からだましとる者に対処される。このお方は「復讐はわたしのすることである。わたし自身が報復する」と仰せになる（ローマ 12:19）。（同上 1899 年 1 月 3 日）

6月27日

ピラトからヘロデへ

「〔祭司長たちと群衆〕は、ますます言いつのってやまなかった、彼は、ガリラヤからはじめてこの所まで、ユダヤ全国にわたって教え、民衆を煽動しているのです。ピラトはこれを聞いて、この人はガリラヤ人かと尋ね、そしてヘロデの支配下のものであることを確かめたので、ちょうどこのころ、ヘロデがエルサレムにいたのをさいわい、そちらへイエスを送りとどけた。」（ルカ 23:5-7）

〔ピラト〕は、イエスがガリラヤ人であり、ヘロデの管轄下にあることを聞いたとき、さらなる困難から免れる機会をとらえて、訴訟に判決を下すことを拒否し、このお方をその時エルサレムにいたヘロデに送った。

イエスは睡眠も食事もとっておらず、また受けた虐待によって弱く疲れておられたが、このお方の苦しんでおられる状態は、迫害している者たちの心に何の哀れみも呼び起こさなかった。このお方は無慈悲な暴徒の叫びと侮辱の中をヘロデの法廷に引かれていった。イエスの裁判についての責任を逃れるだけでなく、ピラトはこれが自分とヘロデの間の昔のけんかを癒す良い機会だと考えた。彼は自分の側でとるこの行為を、ヘロデの権威の方がまさることを認めた証拠だとヘロデがみなし、それゆえに和解をもたらすだろうと考えたのであった。これについて彼は間違っていなかった。なぜなら二人の行政長官は救い主の裁判をめぐって親しくなったからである。

ヘロデが初めてイエスとこのお方によってなされた力強いわざについて聞いたとき、恐怖におそわれて、「わたしが首を切ったあのヨハネがよみがえったのだ」と言った（マルコ 6:16）。〔ヘロデ〕は〔イエス〕に会って、その驚くべき力を目撃したいと長い間望んでいた。彼はこのお方が自分のもとに囚人として連れてこられたことを喜んだ。なぜなら彼はこのお方の命を救うという条件で、必ずこのお方に奇跡を行わせることができると信じて疑わなかったからである。ヘロデの良心は、ヘロデヤからバプテスマのヨハネの首を求められた恐ろしさに身震いしたときほど、敏感ではなくなっていた。しばらくの間、彼は残忍な女の報復心を満足させるために自分が行った行為に鋭い後悔の痛みを感じていた。しかし彼の道徳的観念はその放縦な生活のためにますます堕落し、自分の罪が自分の目に些細なこととしてしか思われないまでになった。最悪の犯罪をしかねない者たちは、かつては真理の霊によって罪を自覚しながら、光から罪の暗闇へと向かった者たちである。ヘロデはほとんどヨハネの弟子になりかけていたのであったが、決断を下すちょうど重要な時に、彼はサタンのわなにかかり、真の預言者であるとわかっていた者を処刑したのであった。（預言の霊 3 巻 134,135）

6月28日

見せびらかしのための奇跡はない

「ヘロデはイエスを見て非常に喜んだ。それは、かねてイエスのことを聞いていたので、会って見たいと長いあいだ思っていたし、またイエスが何か奇跡を行うのを見たいと望んでいたからである。それで、いろいろと質問を試みたが、イエスは何もお答えにならなかった。祭司長たちと律法学者たちとは立って、激しい語調でイエスを訴えた。」（ルカ 23:8-10）

救い主がヘロデの前に連れてこられたとき、暴徒たちが殺到し押しよせてきて、囚人に対して叫び、ある者が何かの犯罪で告発すると、他の者は別の犯罪で告発するのであった。ヘロデは静粛を命じてイエスのなわを解くようにと命令した。なぜなら彼はこのお方に尋問したかったからである。彼は衝動的な同情の入り混じった好奇心をもって、救い主の悲しいみ顔を見た。そこに深い知恵と純潔が顕著にあらわれていたが、極度の疲れと苦悩を示していた。ピラトと同様に、ヘロデはユダヤ人の性質を知っていたので、恨みと嫉妬によって彼らがこの無実の人を有罪に定めたことを知っていた。

ヘロデはイエスに、ご自分の神性の力の証拠となる奇跡を行うことによって、自分の命を救うようにとせきたてた。しかし救い主にはなすべきそのような働きはなかった。このお方は人の性質をお取りになったのであるから、悪人の好奇心を満足させるために奇跡を行ったり、人が同様な状況において苦しむ痛みと屈辱からわずかでさえもご自分を救ったりすべきではなかった。ヘロデはイエスにご自分の力を群集の前で見せることによって、ご自分が詐欺師ではないことを証明せよとせきたてた。彼はその目的のために不具者や足なえまた肢体の不自由な者たちを呼び集め、高圧的な態度でイエスにこれらの者たちを自分の目の前で癒すようにイエスに命じ、もしイエスが本当にうわさされているような驚くべき癒しを行なったなら、今もなお同じように不思議を行う力を持っているはずであり、いま自分の釈放を得ることによってその力を自分自身の益とすることができると強く促した。

しかしイエスは、傲慢な支配者の前に、あたかも見聞きしていない人であるかのように、静かに立っておられた。ヘロデは繰り返し自分の提案をもってイエスに迫り、自分には釈放する力も罪に定める力もあるのだという事実を繰り返した。彼は差し出がましくも自分を譴責したといって自分が預言者ヨハネに課した罰について、あえて誇ることさえした。これらすべてのことに対して、イエスは言葉でもまなざしでも応じられなかった。ヘロデは囚人の深い沈黙にいらだった。それはご自分を召喚した面前の権威者に対する完全な無関心を示していた。虚栄心の強い尊大な君主にとっては、このように沈黙によって無視されるよりは、公然と非難されるほうがましであった。（預言の霊 3 巻 136, 137）

6月29日

皮肉に王衣が与えられる

「またヘロデはその兵卒どもと一緒になって、イエスを侮辱したり嘲弄したりしたあげく、はなやかな着物を着せてピラトへ送りかえした。」（ルカ 23:11）

イエスは最も偉大な預言者から受けた知識に真っ向から反対してきた者に与える光を持っておられなかった。……イエスの沈黙を、ヘロデはこれ以上耐えることができなかった。彼の顔は激怒で赤くなり、怒ってイエスを脅迫した。しかし、捕虜は依然として動じられないのであった。……

ある者が、彼は自分が神のみ子、イスラエルの王であると公言したと叫んだ。ヘロデはこれを聞いて、あざ笑いながら、彼が王であるかと言った。それならば彼に冠をかぶせ、王衣を着せて、あなたがたの王を拝め。……

鋭いとげのある蔓（つる）で冠が編まれ、イエスの聖なる額に置かれた。そしてかつては王衣であった、古くてぼろぼろになった紫の衣が彼の気高い体にかけられた。その間、ヘロデとユダヤの祭司たちは、暴徒たちの侮辱と乱暴な行為を助長した。それからイエスは、あざけりのうちに王座だと言って大きな石の上に座らせられ、古い葦が笏として彼の手に置かれ、悪魔的な笑いとのろいと嘲りの中で、粗暴な群集はあざけってこのお方の前に王に対するようにひざまずいた。時折、残忍な手がこのお方の手に置かれていた葦を引ったくり、それでこのお方の頭を打ってとげがこめかみに刺さるようにしたので、血がこのお方のお顔とひげをつたってしたたり落ちた。……しかし、天の軍勢に指令し、ご自分を助けるために、一人でこの残酷な暴徒たちを制圧できる聖天使を大勢、一瞬にして召集することのできたお方―ご自分の神性の威光をひらめかせることによって、ご自分を苦しませている者たちを撃ち倒すことができたお方―が、威厳のある平静さをもって、最も粗野な侮辱と激怒を甘受された。このお方を苦しめている者たちの行為が彼らを人間以下のサタンに似た者にまで堕落させたように、イエスの柔和と忍耐はこのお方を人性のレベルを超越して高めたのである。

ヘロデは、イエスがご自分の上に積みあげられたあらゆる侮辱に逆らうことなく甘受し、これらすべてを通じてほかに例を見ない平穏さを保っておられるのを見たとき、結局のところ彼は普通の人間ではないかもしれないという突然の恐れに動かされた。……〔イエスを嘲ろうとして来た者たち〕は苦しんでおられるお方のお顔をのぞきこんで、王のような顔つきが表れているのを見たとき、彼らは引き返し、自分たちの大胆さを恥じた。ヘロデは落ち着くことができず、かたくなではあったが、ユダヤ人たちの宣告をあえて承認しようとはしなかった。従って彼は、イエスをピラトに送り返した。（預言の霊 3 巻 137-140）

このお方にはなんの過ちもない

「ピラトは、祭司長たちと役人たちと民衆とを、呼び集めて言った、おまえたちは、この人を民衆を惑わすものとしてわたしのところに連れてきたので、おまえたちの面前でしらべたが、訴え出ているような罪は、この人に少しもみとめられなかった。ヘロデもまたみとめなかった。現に彼はイエスをわれわれに送りかえしてきた。この人はなんら死に当るようなことはしていないのである。だから、彼をむち打ってから、ゆるしてやることにしよう。」（ルカ 23:13-16）

救い主は疲労でよろめき、青ざめ傷つき、嘲りの衣といばらの冠をつけて、無情にもローマの総督の法廷へと急いで返された。ピラトは非常にいらだっていた。なぜなら、イエスを訴える者たちをヘロデに委ねたとき、恐るべき責任から逃れることができたことを喜んでいたからである。今、彼はいらだちながらユダヤ人たちに自分に何をさせようとするのかと尋ねた。彼は自分がすでに囚人を調査し、何も責めるところを見出すことができなかったこと、また彼の告発者たちは、彼に対するたった一つの告発を維持することもできなかったことを、彼らに思い出させた。……ピラトは、「だから、彼をむち打ってから、ゆるしてやることにしよう」と言った（ルカ 23:16）。

ここでピラトは彼の弱さをあらわした。彼は、イエスの訴えられた犯罪の無罪を宣言しておきながら、残酷な暴徒たちと妥協するために、正義と原則を部分的に犠牲にするのをいとわなかった。彼らの非人間的な怒りをなだめるために、彼は無罪の人が懲らしめられるのをいとわなかった。しかし、ピラトが彼らと折り合いをつけようと申し出た事実は、いまや始末に終えない群集に対してピラトを不利な立場に置いた。彼らは彼の優柔不断につけこみ、さらに囚人の命を強く要求するのであった。ピラトは人々に向かい、祭司と長老たちはイエスに対して持ち込んだ告発を少しも立証しなかったと言明した。彼はこれによってこのお方に対して彼らの同情を起こし、それによって彼らがこのお方を釈放することに同意することを望んだ。その間イエスは、極度の疲労によって大理石の通りに倒れてしまわれた。ちょうどそのとき、一人の使者が群集をおしわけて来て、ピラトの手に彼の妻からの手紙をわたした。……神が彼女にこの警告を送られたのであった。それは彼女を通して、ピラトが神であられる神のひとり子を死に渡すという恐ろしい罪を犯さないよう守られるためであった。ピラトはメッセージを読んだとき真っ青になった。しかし祭司と支配者たちは、その間にさらにいっそう人々の心をあおりたて、ついに彼らは激怒し、狂気じみた状態にまでに達した。（預言の霊 3 巻 140, 141）

研究 2

神の憐れみの最後の招き

「第三天使の大いなる叫び」

預言 - 第三天使の大いなる叫び

「わたしは、神が、名目的再臨信徒たちと、堕落した教会の中に、心の正しい人々を持っておられるのを見た。そして、牧師や信者たちが、災害が、くだされる前に、これらの教会から呼び出されて、喜んで真理を受け入れることをわたしは見た。サタンは、この事を知っている。第三天使の大いなる叫びがあがる前に、サタンは、これらの宗教団体に、興奮を起こさせ、真理を拒んだ人々に、神が彼らと共におられると思わせるのである。サタンは、心の正しい人々を欺いて、神がなお教会のために働いておられると彼らに思わせたいと願っている。しかし、光が輝き出る。そして、心の正しい人はみな、堕落した諸教会を去り、残りの民に加わるのである」（初代文集 424）。

この中に「心の正しい」とある人々は、honest（正直）である人々のことです。つまり、サタンの偽善から守られるのは、正直な人々だということがわかります。その正直な人々についてはまた次のように書かれています。

「しかし、『思慮深い者』、すなわち正直な者たちは理解するであろう」（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1885 年 12 月 15 日）。そうであれば、思慮深い者とはだれでしょうか。

「知恵のある者はだれか。その人にこれらのことを悟らせよ。悟りある者はだれか。その人にこれらのことを知らせよ。主の道は直く、正しき者はこれを歩む」（ホセア 14:9）。

「あなたがたのうちで、知恵があり物わかりのよい人は、だれであるか。その人は、知恵にかなう柔和な行いをしていることを、よい生活によって示すがよい」（ヤコブ 3:13）。

思慮深い者は、その知恵が主にある生活に表れていることがわかります。

また、初代文集の 448-451 に大いなる叫びについて記されており、そこにも次のようにあります。

「待ち望んでいる人々の上にそそがれていた光は、至る所に輝きわたった。諸教会の中で、幾らかでも光を持っている人々や、三重のメッセージを聞いてこれを拒まなかった人々は、呼び声に応じて、堕落した教会を離れた。……第三天使のメッセージはその働きをしなければならなかった。全部の者がこのメッセージによって試みられ、とうとい者たちが宗教団体から呼び出されるはずだった。正直な人たちは、やむにやまれぬ力に動かされた。神を信じない肉親の者や友人たちは、神の力のあらわれを見て恐れ、自制し、神の霊の働きを感じた人々を妨害しようとする気持ちも、またその力もなかった」(初代文集 450)。

「異国に捕らわれていた人々が、『バビロンのうちからのがれ出』よ、という言葉に従って、約束の国に回復されたように、今日、神を恐れる人々は、霊的バビロンから出よという言葉に心を留めている。やがて彼らは新たにされた地、すなわち天のカナンにおいて、神の恵みの記念として立つのである (エレミヤ書 51:6)」(国と指導者下巻 316)。

この「バビロンのうちから逃れ出よ、との言葉も、3 回聞かれたのでした。与えられたメッセージを心にとめている人々、すなわち主の警告をあなどることをしなかった人々、そして思慮があることをその生活が証している正直な人々は、「バビロンのうちからのがれ出」よ、という大いなる叫びを聞いて応じるのです。

それでは、なぜこのメッセージが伝えられなければならないのでしょうか。次の聖句に注目してください。

「起きよ、光を放て。あなたの光が臨み、主の栄光があなたの上にのぼったから。見よ、暗きは地をおおい、やみはもろもろの民をおおう。しかし、あなたの上には主が朝日のごとくのぼられ、主の栄光があなたの上にあらわれる。もろもろの国は、あなたの光に来、もろもろの王は、のぼるあなたの輝きに来る」(イザヤ 60:1-3)。

これまでの証の書の言葉にあるように、もう一人の御使のメッセージのポイントは、「光」「栄光」「輝き」です。この光は、闇と暗きを解決するために必要なものでした。これがこのメッセージの必要性です。

では、実際的に闇が光に勝てなかったというのは、どういう意味でしょうか?

「世界は神に関する誤った解釈の暗黒におおわれている。人びとは、神の品性の知識を見失い、それを誤解し、誤って理解している。この時にあたって、神からの使命、よき感化を与え、救いの力をもった使命を宣言しなければならない。

神の品性を明らかにしなければならない。世界の暗黒の中に、神の栄光の光、恵みとあわれみと真理の光が輝かなければならない。

預言者イザヤは、この働きのことを次のように述べている『よきおとずれをシオンに伝える者よ、高い山にのぼれ。よきおとずれをエルサレムに伝える者よ、強く声をあげよ、声をあげて恐れるな。ユダのもろもろの町に言え、「あなたがたの神を見よ」と。見よ、主なる神は大能をもってこられ、その腕は世を治める。見よ、その報いは主と共にあり、そのはたらきの報いはそのみ前にある』(イザヤ書 40:9,10)」(キリストの実物教訓 391, 392)。

「キリストが地上に来られたのは、人間を救うためだけではなかった。この小さな世界の住民が、神の律法に対して当然払わなければならない尊敬を払うようになるためだけではなかった。それは、宇宙の前で、神の性質を擁護するためであった。救い主は、十字架におつきになる直前に、その大犠牲が、人間だけでなくて、他の諸世界に住む者たちに与える影響を予見して、こう言われた。『今はこの世がさばかれる時である。今こそこの世の君は追い出されるであろう。そして、わたしがこの地から上げられる時には、すべての人をわたしのところに引きよせるであろう』(ヨハネ 12:31, 32)。人間の救いのためにキリストが死なれた行為は、人間が天にはいる道を開いたばかりでなく、神とみ子が、サタンの反逆に対して取られた処置の正当性を全宇宙の前に示すのであった。それは、神の律法の永遠性を確立し、罪の性質とその結果を明らかにするのであった」(人類のあけぼの上巻 61, 62)。

「アベルは、柔和に、しかも恐れることなく、断固として神の公平と恵みを弁護した。彼は、カインの誤りを示し、彼がまちがっていることを納得させようとした。アベルは、両親が直ちに死の刑罰を受けるはずであったのに、彼らをお助けになった神のあわれみを指摘して、神が彼らを愛されたのでなければ、汚れのないきよいみ子を、彼らが当然受けるべき刑罰を受けるためにお与えになることはないと力説した。こうしたことは、みな、カインを激怒させた」(人類のあけぼの上巻 70)。

神様のご品性に対する誤解が大きければ大きいほど、大いなる叫びは大きくなるのです。それはちょうどアベルの時と同じです。

「その時、見よ、イスラエルの神の栄光が、東の方から来たが、その来る響きは、大水の響きのようで、地はその栄光で輝いた」(エゼキエル 43:2)。

東は、シカイナ、すなわち神の栄光のあるところです。初めにエデンの東の門にケルビムをおき、ご自分の栄光を表してくださったのでした。このようにその栄光で地が輝くことが預言されています。

すなわち、大いなる叫びとは＝神のご品性を擁護すること＝神の律法を守ることなのです。

(44 ページの続き)

う。彼女は世界の栄光の冠となっていたことでしょう。

しかし、ユダヤ人たちは自分たちの救い主を拒みました。彼らはまさに自分たちの王を十字架につけようとしていました。そして、太陽が沈むその夜、エルサレムの滅亡は永遠に決定されるのでした。(約 40 年後、ローマ軍の炎によってエルサレムは完全に破壊され、焼かれました。)

イエスさまが信者の多大な一団を連れて都に近づいておられるという知らせが、役人たちのところに届きました。彼らは群衆を散らしたいと望みながら、このお方を迎えるために出ていきました。たいそうな権威を見せびらかしながら、彼らはたずねました。「これは、いったい、どなただろう」(マタイ 21:10)。

弟子たちは霊感に満たされて答えました。「アダムはあなたがたに告げるでしょう、彼は蛇の頭をくだく女のすえであると。」

「アブラハムに尋ねたならば、彼はあなたがたに告げるでしょう。それは『サレムの王メルキゼデク』平和の王であると。」

「ヤコブはあなたがたに告げるであろう、彼はユダ族のシロであると。」

「イザヤは告げるであろう、『インマヌエル』『霊妙(れいみょう) なる議士(ぎし)、大能の神、とこしえの父、平和の君』であると。」

「エレミヤは告げるであろう、彼はダビデのわかれ、『主はわれわれの正義』と。」

「ダニエルは告げるであろう、彼はメシヤであると。」

「ホセアは告げるであろう、『主は万軍の神、その名は主である』と。」

「バプテスマのヨハネは告げるであろう、彼は『世の罪を取り除く神の小羊』であると。」

「大いなる神エホバはそのみ座から宣告された『これはわたしの愛する子』であると。」

「このお方の弟子であるわれわれは宣言します、『これはイエス、メシヤ、命の君、贖い主』であると。」

「暗黒の勢力の君でさえこの方を認めて言いました『あなたがどなたであるか、わかっています。神の聖者です』と。」

なすのはさみ揚げ

■材料（4 人分）

グルテンバーガー小缶	1
なす	4 本
玉ねぎ	1/2 個
塩	小さじ 1/2
昆布だし	少々
水	大さじ 1
ショウガのみじん切り	1 かけ
小麦粉	大さじ 1
片栗粉	適量
サラダ油	適量

■作り方

1. ボウルにグルテンバーガー、玉ねぎのみじん切りと、塩、だし昆布、小麦粉大1と水、ショウガを入れよく混ぜあわせます。
2. なすはへたを取り、2 センチの輪切りに切り、厚みを半分にするように途中まで切り込みを入れます。
3. 切り目の内側に片栗粉をまぶし、1. の具をはさんで、全体にも片栗粉をまぶします。
4. フライパンに油を入れ 180 度に熱し、3. のなすをこんがりと揚げます。

教会プログラム (毎週土曜日)

安息日学校：9:30-10:45（公開放送）

礼拝説教：11:00-12:00（公開放送）

午後の聖書研究：14:00-15:00

【公開放送】http://www.4angels.jp

聖書通信講座

※無料聖書通信講座を用意しております。

□聖所真理

お申込先：〒 350-1391　埼玉県狭山郵便局私書箱 13 号「福音の宝」係

是非お申し込み下さい。

書籍

【永遠の真理】聖書と証の書のみに基づいた毎朝のよみもの。

【安息日聖書教科】は、他のコメントを一切加えず、完全に聖書と証の書のみに基づいた毎日の研究プログラムです。

イエスの物語

第27話　エルサレム入城（II）

行列がエルサレムを見下ろす丘の頂上まできたとき、輝きに満ちた見事な都が彼らの視界に入りました。

大ぜいの群衆は、不意に現れた美しい光景にすっかり魅せられ、叫ぶのをやめて静かになりました。自分たち自身が感じている感嘆をこのお方の表情に見られるものと思って、すべての目が救い主に向けられました。

イエスさまは足を止められましたが、このお方の表情には悲しみの雲がおしよせていました。そして、群衆はこのお方がこらえきれずに苦悩の涙を流されるのを見て、すっかり驚いてしまいました。

救い主を取り囲んでいる人々はこのお方の深い悲しみを理解することができませんでした。しかし、このお方は滅びの運命にある町のために涙を流されたのでした。

エルサレムはこれまでこのお方の保護のもとにある子どもでした。そしてこのお方の心は、それがまもなく荒廃させられることを知り、苦悩に満たされました。

その住民がキリストの教えに注意を払い、このお方を救い主として受け入れていたなら、エルサレムは「永遠に立った」はずでした。

彼女は諸国の女王となり、神さまから与えられた力のうちに自由であったことでしょう。

武装した兵士たちがその門で待ちかまえていることも、ローマの軍旗が城壁にひるがえることもなかったでしょう。

エルサレムから平和のハトが全国民に飛び立ったことでしょ

（41ページに続く）